

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」 ——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方（1）

夏 剛

ヘーゲルは^{どこ}何処かで、全ての世界史的大事件・大人物は
言わば2度現れる、と述べている。彼はこう補足することを
忘れた。1回目は悲劇として、2回目は笑劇として、と。

——マルクス『ルイ・ボナパルトの霧月18日』
(第2版, 1869)

「核心」への画期的な昇格

2016年は英国の国民投票に拠る^{E U}欧州連合離脱決定(6.23)、米国大統領選(11.8)の共和党候補トランプ(1946～)勝利に由って、^{それぞれ}世界史の重要な転換点と為った。其々19世紀・20世紀の世界最強国である英・米は、^{ボビュリズム}大衆迎合主義の劇場政治の渦巻きの中で自国優先の保護主義へと急旋回した。投票率が72.2%の前者では残留派が48.1%対51.9%の僅差で否定され、大方の予想を覆す結果は^{地球村}地球村に激震を走らせ株式・為替市場の狼狽売りを引き起した。投票率55.3%の後者では民主党候補ヒラリー(1947～)は得票数で48.1%対46%の優位を占めたが、選挙人票獲得数の227対304の大差でまさかの敗北を喫した。クリントン元大統領(1946～, 93.1.20より2期・8年)夫人・元国務長官(2009.1.21～13.2.1)は、知名度・経験に恵まれながら政界・兵役歴が無い不動産王の^{掟破り}掟破りの戦法に勝てなかった。経済の^{バロメーター}晴雨計を為す株式市場では^{驚天動地}驚天動地の変化が起きる直前と最中に^{続落・暴落}続落・暴落したが、金融市場に^{激甚な打撃}激甚な打撃を与える^{想定外の極稀の突発的・破壊的な事象}想定外の極稀の突発的・破壊的な事象に譬える「^{黒白鳥}黒白鳥」は、「^{パナマ文書}パナマ文書」(パナマの法律事務所が作成した租税回避行為関連の機密書類1150万点)の公表(4.3)でも現れた。米国の情報通信産業超大手Google傘下の英国の^{新興企業}新興企業DeepMindが開発した囲碁対局^{ソフト・ウェア}ソフト・ウェア^{アルファゴ}AlphaGoが、韓国の世界王者^{李世石}李世石九段(1982～)への挑戦(3.9～15,^{ソウル}ソウル首爾)で不利の下馬評を嘲笑う様に4-1の圧勝を取め、究極の頭脳競技で人間を凌ぐ

人工^A知能^Iの新紀元を切り開いた。瑞典^{スウェーデン}学士院がノーベル文学賞を創設（1901）以来初めて自作自演^{シンク・ソング・ライター}歌手に授与し（10.13）、桂冠を捧げられた米国のポップ・ディラン（1941～）は半月の沈黙を経て漸く受諾した。こうして政治・経済・学芸の領域とも常識と懸け離れた異次元へ突入した観が有り、奇天烈^{きてれつ}で摩訶不思議な事象に振り回される人類の生存空間の変質の印象が深まる。

「パナマ文書」は前年8月に匿名の情報提供者の送信で『南独逸新聞』に流出したが、情報化社会の恐さを示す関連の韓国の政治醜聞^{スキャンダル}の暴露として、独逸滞在中の実業家崔順実^{チェスンシル}（1956～）が処分した個人用パソコン^{パソコン}を入手したテレビ局が10月24日、大統領の演説の草稿等文書44点を発表前に受け取っていたと報じ、民間人に由る国政壟断疑惑で朴槿恵大統領（1952～，2013.2.25 就任）が12月9日に国会の弾劾^{だんがい}を受け職務停止と為った。一方、「パナマ文書」で複数の最高指導部^{メンバー}成員の親族の名前が曝された中国では、10月24～27日に共産党第18期中央委員会第6回全体会議（中国語の略称＝「18届6中全会」）が挙行され（開催地は首都[北京]の場合、特に記さない）、^{コミュニケ}「公報」に「以習近平同志為核心的党中央」（習近平同志を核心と為す党中央）という画期的な文言が盛り込まれた。毛沢東（1893～1976）・鄧小平（原名[本名]先聖、学名[学校に上がる時から使用する正式な名前]希賢、1904～97）・江沢民（1926～）に次ぐ中核の位置付けは1人への強権集中を容認するもので、習（1953～）は領袖又は最高実力者の地位を自ら挽ぎ取った毛・鄧の様に着々と基盤を固めている。江は鄧から付与された「核心」の称号の御蔭^{おかげ}で党首（総書記）を2.5期強（13年4ヵ月）務め、党の第16回全国代表大会（中国語の略称＝「16大」）。2002.11.8～14）後も変則的に党・国家の中央軍事委員会主席に留任し、退任（04.9.19, 05.3.13）まで実質的に3期に相当する15年以上も君臨できたが、習は2期目（17.10.25より5年）に入る前にもう3期続投の観測が盛んに出ていた。2期目の内に建党100周年（2021）の節目が有り、3期まで行けば中共軍創立100周年（27）と巡り合せる様になる。黨員数は近來の増加速度制限の結果2016年末には前年比0.8%増の8944.7万人に上り、独逸の総人口より700万も多い一大勢力の1億到達も2030年頃には略確実であろう。党・軍・国首領の「超強」型の出現は1歳年上のプーチン^{ほほうふつ}を彷彿させるが、露西亜^{ロシア}の第2代大統領（2000.5.7より8年）・第9代首相（08.5.7より4年）を経て、習体制誕生の半年前（12.5.7）に再び大統領に就任し、08年の憲法改正で4年から6年に伸びた任期が満了後4期目（～24.5.7）に突入した彼が、仮に中国の「核心」の未来像であると為れば、習の4期（20年）に及ぶ超長期支配の可能性も空想として一笑に付し得ない。

世界で人口が最も多い国は中華人民共和国の成立（1949.10.1）以来、^{プロレタリア}「無産階級専政」の名に由る1党独裁の治下に置かれて来た。大陸時代の国民党政権（1927.4.18～49.9.30）の「党国」の呼称こそ使わないものの、国家は終始唯一不変の「執政党」（政権党。与党）に由って支配されている。国家を統括する党の権力の頂点は1桁の要人から成る最高指導部であり、その

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方 (1) (夏)

長を為す党首又は最高実力者の意志が党・国を動かす事は少なくない。毛沢東は初代総理周恩来 (1898~1976) の逝去後に序列 1 位の副総理鄧小平を昇格させず、12 人の副総理中 6 位の華国鋒 (原名蘇铸, 1921~2008) を「代総理」(総理代行) にし、半ば失脚中の鄧に代って「主持中央工作」(党中央の業務を統率する) の権限を付した。同年の清明節 (4.5) に周を悼み鄧の復権を望む大衆^{デモンストレーション} 示威で第 1 次天安門事件が起り、毛は即日鎮圧後 7 日の政治局会議で華を党中央第 1 (筆頭) 副主席・総理に推し可決させた。「党首=最高実力者」の一元化は 27 年に亘った毛沢東時代の後に、毛の側近「4 人組」を逮捕する政変 (10.6) の当夜の政治局会議で華は党・軍委主席に推挙され、国家主席を設けない時代の国务院 (内閣) の長の兼務で異例の 3 大職集中と為った。彼は人為的に作られた「英明な領袖」の地位を 2 年余り維持したが、鄧を頭とする元老集団・改革派の実権掌握に由って有名無実と化した。華は第 5 期全国人民代表大会 (国会, 略称「全人大」) 第 3 回全体会議 (1980.8.30~9.10) で、党政分離の原則に従って政府首脳の座を趙紫陽 (1919~2005) に明け渡した。総理辞任に続いて 11 期 6 中全会 (1981.6.27~29) で党・軍首領からも退き、胡耀邦 (1915~89) が党首に推された。「12 大」(1982.9.1~11) の「中国共産党章程」(党規約) 改正 (9.6 採択) で主席制は廃止と為り、「党首=総書記」制に移行したが、鄧の軍委主席就任に由って華国鋒時代後期と異曲同工の二重権力構造が生じた。

国民革命軍北伐総司令蒋介石 (乳名 [幼名] 瑞元, 譜名 [家譜上の名前] 周泰, 学名志清, 後に中正に改名, 介石は字, ^{あざな} 1887~1975) が起した反共軍事政変 (1927.4.12, 上海) の後、毛沢東 (中央委員候補) は党中央緊急会議 (8.7, 武漢) で武力抗争を主張し、「槍桿子里出政權」(鉄砲から政權が生れる) という名言を放った。初代党首陳独秀 (1879~1942) の総書記解任を決めたこの秘密会合で彼は鄧小平と初対面したが、2 人とも軍委主席の職位に強い執着を見せたのは政權の「先軍」性質に由る。この鍵詞は金正日 (1941~2011) が朝鮮労働党総書記就任の 97 年に打ち出した「先軍政治」に由来し、自ら務める国防委員長を国家の最高職責 / 指導者に引き上げた 98 年・09 年の憲法改正は、蒋介石を「(党) 総裁」「(国民党・国民政府軍事委員会) 委員長」と呼ぶ国民党に通じる志向を持つ。朝鮮民主主義人民共和国 (1948.9.9 成立, 以下「北朝鮮」と称す) は中共政權と共に、旧ソ連が遺した 1 党独裁の世界最長記録 (74 年 1 ヶ月) の更新へと向っている。鄧は胡耀邦を 1987 年 1 月 16 日の政治局拡大会議で失脚させた後、趙紫陽総書記兼総理に軍委第 1 副主席を与えたものの、独裁の担保と為る軍委主席の続投に拘って同年の「13 大」(10.25~11.1) で党規約を修正させ、担当資格は政治局常務委員から中央委員会が決定する者に変更した。露骨な別格扱いと恣意な院政の弊害は第 2 次天安門事件 (1989.4 下旬~6.4) で露呈したが、江沢民を党・軍・国家首領にした後の実質的な全権譲渡は 14 期 4 中全会 (94.9.25~28) で始めて完了したので、改革・開放時代 (78.12.22 発足) の全任期中の「党首=最高実力者」は習近平が第 1 号である。

鄧小平は「^{ベルリン}伯林の壁」崩壊の11月9日に軍委主席を退任した後も政局に関与し続け、突出した例は1992年1月18日～2月21日の「南巡」（南方視察）である。彼は前年のソ連共産党解党・ソ連邦解体（12.13・25）に危機感を覚え、**経済の停滞や国際社会での孤立から脱出**すべく**改革・開放の再点火**を決意した。武漢・広東・上海等で発した「南巡講話」は指導部の無力・不作為への苛立ちを滲ませ、「改革・開放の総設計師」の鞭撻の効き目で保守化・硬直化した局面に再び活気が付いた。その一喝が無ければ後退が止められない状況は「平穩・無事」の危うさを思わせ、平党員に過ぎない元最高実力者が支配力を失わない「人治」伝統の根強さも実感できる。「南巡」の「巡」は巡視と共に巡幸の意も有るので「^{ラスト・エンペラー}末代皇帝」の最後の闘争と言えようが、功罪の決算では「92推進」の貢献は到底「6.4鎮圧」の損害を帳消しできない。彼は党中央副主席（党内序列3位）時代に党内外の支持を楯に守旧派の華国鋒の勢力を削ぎ、11期3中全会（1978.12.18～22）で**経済重視の改革・開放路線の採択**を実現させ、「文化大革命」（1966～76）を起した毛沢東の階級闘争志向と訣別し党・国を前進させた。改革・開放に由る**持続的な高度成長の結果**32年後に中国は世界第2位の経済大国と成ったが、「改革・開放元年」（1979）に**対^{ベトナム}越南「辺境（国境）自衛反撃戦」（2.17～3.16）**を起し、「8老（8人の元老）治国」体制の下で2人の総書記を超法規的に更迭し、85歳まで務め続けた軍委主席の指揮権を強引に発動し大衆の民主化運動を武力で潰した。事変直後の13期4中全会（6.23～24）で趙紫陽→江沢民の総書記交代が正式に決定され、11月9日に軍委主席、1993年3月27日に国家主席に就任した江は鄧の代理の形で新体制を率いた。「南巡」後の14期1中全会（1992.10.19）で選出された政治局常務委員会に、次世代党首予定者として胡錦濤（1942～）が前期の中央委員から2段跳び昇進で入った。意中の新星に対する「隔（世）代指名」が最後の大事な仕事なので、鄧小平時代は江沢民時代と同じ13年に亘って続いた計算に為るが、胡の総書記2期終了（2012.11.15）まで**34年間も拘束力を保ち続けたとも見て可い**。鄧は党内序列では3位（1977.8.19～81.6.29）が最高だったものの、胡耀邦・趙紫陽総書記の時代に絶大の実権を握っていたが、敢えて党首に為らず党首を動かす事に徹する有り形は党首であり続けた毛沢東とは異なる。習近平は先輩の指名に由らず自力で王座に就いた点では毛以降の5人の党首を超えており、一躍して**名実俱に全てを凌駕する頂点に登った点では最早鄧どころか毛をも上回っている**。

「名の文化」の「名正→言順→事成」

米国の文化人類学者ベネディクト（1887～1948）は『菊と刀——日本文化の型』（46）の中で、日本人の行動様式から恩義・義理を重んじる等の日本的な価値体系を抽出し、己の良心を意識する欧米の「罪の文化」の対置概念として、他者の批判を気にする日本の「恥の文化」を重要な発見としている。彼女が日本固有・特有の物と見た事象や原理には中国との通底は少な

いが、西洋の「罪の文化」と日本の「恥の文化」に対する中国の「名の文化」は、名誉に対する追求や名分に対する重視する等の志向・傾向が特徴と為る。儒教の始祖である思想家・教育家孔子（名は丘、紀元前 551～前 479）は、「名不正則言不順、言不順則事不成」（名正しからざれば則ち言順わず、言順わざれば則ち事成らず）と言って、「正名」（名を正すこと）を為政の要に挙げた（『論語』「子路」）。その逝去 2400 年後に中国共産党が結成され、生誕 2500 年後に中共政権が誕生したが、習近平の「核心」の名義取得は両者の千年単位の年輪での奇妙な連環と符合する様に、封建王朝の秩序維持の礎にも有った「正名」の効用を示している。キリスト教の経典『新約聖書』の中のイエス（耶蘇）・基督（前 4 頃～後 28）の言行を記した『ヨハネの福音書』の冒頭に、「太初に言有りき。言は神と共に在り、言は神也き」と有る。中国語訳の「太初有道。道与神同在。道即为神。」の「道」は動詞を兼ねる処が妙味で、「言 / 謂 / 云（う）」「説（く）」と「神」の同居・同一は言説の神通力を思わせ、毛沢東に対する個人崇拜の「造神」（神格化）も言辞を用いる洗脳から始まった。孔子の言行・弟子・時人等との問答、門人同士の対話等を集録した『論語』は、『礼記』中の「大学」「中庸」の 2 篇及び『孟子』と共に四書を為す。四書は『易経』『書経』『詩経』『礼記』『春秋左氏伝』の五経と並ぶ儒教の経典であるが、政治・教育等に関する見解が多い『論語』は枢要の書の中の枢要と言え、孔子が唱えた理想的な道徳・秩序の「仁・礼」は儒家の「核心（中核的）価値観」に他ならぬ。『論語』は 20 世紀初頭まで「蒙学（啓蒙学習）」の教材として広く使われ、多くの語録は暗誦によって学童の脳裡に刻み込まれ続けた。中共政権下の類似の思想「灌輸」（注入）は『毛主席語録』の全国民学習・暗記であり、「文革」前期に生きた中国人は一部の学齡前の幼児や文盲も含めて刷り込みを受けた。『毛主席語録』は『聖書』に次ぐ史上 2 番目の 50 億冊もの発行部数を記録したが、基督教の偶像崇拜禁止と逆の偶像崇拜煽動は人類史上最大級の「造神」運動と言えよう。

中国人民解放軍総政治部編の毛語録（1964）が軍から社会に広がった事も「先軍」主導の例に為るが、中共政権の「先軍」特質は最高指導者の公式訃報の題の語順にも現れている。その「告全党全軍全国各族人民書」（全党・全軍・全国各民族人民に告げる書）は、毛沢東死去の時（1976.9.9）は中国共産党中央委員会・中華人民共和国全国人民代表大会常務委員会・中華人民共和国国務院・中国共産党中央委員会軍事委員会の連名と為り、鄧小平死去時（97.2.19）の 2 回目では国務院の次は中国人民政治協商会議（共産党主導の政治助言機関）全国委員会・中国共産党和（＝並びに）中華人民共和国中央軍事委員会に変わったが、何れも党→国→軍の順なのに告知の対象に於いて「全軍」は「全国各族人民」の前に来る。蒋介石の日本降伏時の演説「抗戦勝利告全国軍民及全世界人士書」（抗戦に勝利し全国の軍民及び全世界の人士に告げる書、1945.8.15）、大陸・台湾時代の恒例の「元旦告全国軍民同胞書」でも「軍民」を使っていたし、「総統蔣公遺囑」（中華民国 64 年 [1975] 3.29）にも「全国軍民、全党同志」「海内外

軍民同胞」と有る。死去の翌日(4.6)副総統から第5代総統(～1978.5.20)に昇格した嚴家淦(1905～93)は、尊崇・追悼を表す主旨の「総統令」で「志哀辦法(弔意表示方法[細則])」を發布し、「全国軍・公・教人員」に1ヵ月の喪章着用を義務付け、「全国各部隊・機関・学校」等に30日間の半旗掲揚を求める第1・2条は、やはり軍隊・軍人が役所・公務員と学校・教員の上に置かれる。台湾は世界史上最長の全域戒嚴(1949.5.20～87.7.15)の様に準戦時状態が長く続き、政府・教育部門を凌ぐ軍の首位は開發独裁体制に相応しいかも知れないが、流石に「軍・国」主義(造語)を唱えない毛も軍を「民・学」の格上と位置付けた。彼は1962年1月11日～2月7日の中央工作會議(拡大)で講話する際(1.30)、「工、農、商、学、兵、政、党這七個方面、党是領導一切的。」(工[業]・農[業]・商[業]・学[教育]・兵[軍事]・政[府]・党という7分野に於いて、党は一切を指導するのだ)と述べた。そして1973年12月14日に一部の政治局成員との談話で、「政治局是管全部的、党政軍民学、東西南北中。」(政治局は全てを管理するのだ。[全てとは]党・政・軍・民・学[の全領域]、東・西・南・北・中[の全地域])と言い切った。党中央機関紙『人民日報』の1974年7月1日の社説「党是領導一切的」は、「中国共産党是全中国人民的領導核心。没有這樣一個核心，社会主义事業就不能勝利。」(中国共産党は全中国人民の指導核心である。この様な核心が無ければ、社会主义事業は勝利できない)という毛の論断を引き、更に「党政軍民学、東西南北中、党是領導一切的。」と毛語録を合成させた。53周年「党慶」(建党記念日)の党の「喉舌」(代弁・発信装置)が発したこの17字命題は、43年後の「19大」(2017.10.18～24)の習近平の政治報告と党規約に1字も違わず盛り込まれたから、「文革」世代の記憶と意識にこびり付いた毛の言説の浸透と呪縛は絶大である。

「党が一切を指導する」方針が初めて党中央の公式文書に明記されたのは、政治局の「關於統一抗日根拠地党的領導及調整各組織間關係的決定」(抗日根拠地の党の指導の統一及び各組織間の關係調整に関する決定、1942.9.1)である。「党は無産階級的先鋒隊和无産階級組織的最高形式、它應該領導一切其他組織、如軍隊、政府与民衆团体。」(党は無産階級の前衛部隊と無産階級組織の最高形態であり、他の全ての組織、例えば軍隊・政府と民衆団体を指導すべきである)という規定は、「党政軍民關係中(實際上是軍員系統中黨員幹部的關係)」(党政軍民の關係[實質的には軍隊人員系統に於ける黨員幹部の關係])の協調を図る為であるが、熟語の「党政軍民」と違う「軍隊・政府」の順と合せて又「軍先」志向が読み取れる。同年2月1日に党中央所在地の陝西省延安で毛沢東が起した「整風運動」の一環として、党の支配強化と共に實質的な党首の毛の權勢増長を目指す狙いも有ったろう。中国工農紅軍(勞農赤軍)の長征(1934.10.17～35.10.19、江西省瑞金～陝西省吳起)の途中、35年1月15～17日の政治局擴大會議(貴州省遵義)で党・軍の指導部が改組され、博古(原名秦邦憲、1907～46)の党中央総責任者(31.9就任)の解任に伴って、張聞天(1900～76)が6代目の党首と為り、周恩来に

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方 (1) (夏)

軍事指揮の最終決定権が与えられた。政治局委員から常委に昇格された毛は8月4～6日の政治局会議（四川省松潘県毛児蓋沙窩寨）の後、アメーバ性肝膿で倒れた周の代りに全軍の指揮権を手に入れた。1938年9月14～27日の政治局会議で「共産国際」^{コミンテルン}から彼の事実上の領袖の地位が認められたが、中央政治局・書記処（政治局常委会に相当）主席の就任で名実共に党首と為ったのは、43年3月16～20日の政治局会議の「中共中央關於中央機構調整及精簡的決定」（中央機構の調整及び簡素化に関する中共中央の決定）に由る事である。毛の**首座独占・全權掌握・異端排除・自派拡大の仕掛け・仕上げと為る整風運動**は、現代中国史の重要事項として『広辞苑』（新村出編、岩波書店）にも入っており、第6版（2008）の【整風】は「（三風整頓の略。三風とは学風・党风・文風を指し、風とは活動方法をいう）一九四二年、毛沢東が中国共産党内における思想方法上の主観主義、党活動上のセクト主義、文筆活動上の空言主義の克服を呼びかけた運動。その後も五七～五八年の第二次整風運動など何度もくり返された」と説明され、第7版（18）では最後の1文の前の部分は、「（“風”は活動方法をいう）中国共産党独特の党内引締め活動。一九四二年、毛沢東が党内における思想・活動方法上の誤りや偏向の克服を呼びかけて始まった」に改められた。その前の【腥風】の項（辞書引用の場合、特に断りが無い限り現行版に拠る）は、「なまぐさいかぜ。また、殺伐な気」であるが、毛の政治的な遺言にも出た「腥風血雨」（腥い風が吹き血の雨が降る）は、虐殺の惨らしい様の形容に使う中国独特の四字熟語である。延安整風の高邁な建前の裏には正に血腥い「残酷闘争、無情打撃」に満ちており、思想・組織両面の抑圧・粛清の中の「党指導一切」の号令は自ずと必殺の威力を持つ。根拠地指導部の統一・一元化の現れとして全てを指導する党委が最高指導機構を為し（各地区の党政軍委員会は撤廃する）、中央代表機構と地区党委の決議・指示に対して下級党委と同級の政府・軍隊・民衆団体は無条件で服従せねばならぬ、等の規定は建国後も「文革」中の党組織機能停止期以外は有効性を保ち続けて来た。

延安整風の号砲を為した毛沢東の演説「整頓党的作风」（党の作风を整頓せよ）は、高級幹部養成機関の中共中央党校（党中央学校）の始業式で行ったものである。彼は同年6月2日に設立した整風指導機構の中央総学習委員会の主席と為り、両副主席の劉少奇（1898～1969、中共中央華中局第1書記・国民革命軍新編第4軍〔南方中共軍〕政治委員、翌年3月より中央書記処書記〔毛に次ぐ3人中2位〕・康生（原名張叔平、又名〔別名〕張紹卿、1898～1975、中央社会部部长）と彭真（本名傅懋恭^{ほう}、1902～97、中央党校副校長〔副学長〕）の協力の下で、王明（原名陳紹禹、1904～74、「共産国際」中国代表）等の海外留学組、周恩来・彭德懷（原名得華、1898～1974、国民革命軍第8路集团軍〔北方中共軍〕副総司令）・陳毅（1901～72、新4軍軍長）等の王明補佐経験者を、「主観主義」「経験主義」等と断罪し自己批判させた。中共は建党からソ連主導の世界各国の共産党の組織の支配的な影響を受け続けていたが、1919年3月2日にモスクワで成立した第3^{インターナショナル}「国際」（「共産国際」は中国語表記）は遂に解散した

(43.6.10)。「^{コミンテルン}共産国際」の指名で1930年6～9月に党首代理を務めた王の失脚と毛の党首就任は、中共が完全に自立し独自の道を歩める様になった事を意味する。新主席を迎えた党中央の4月13日の決定で続行した整風は、7月に「反革命分子」「内奸」（敵の回し者）の摘発を力点とする幹部審査に移り、拘束・自白強要・拷問乃至処刑に由って少なくとも数千人が命を落し、「肃反（反革命分子肃清）拡大化」に由る冤罪の多発で毛は翌年に何度も詫びを入れた。史上最長の6期7中全会（1944.5.21～45.4.20, 延安）で漸く総括・終結に至り、7期1中全会（6.19）で選出された政治局委員の13人中、総学委^ト3人指導体制^{ロイカ}で毛を翼賛した劉少奇・康生は3位・7位を占め、思想教育・人材特訓^{かなめ}の要である中央党校で校長の毛を支えた彭真是9位と為り、周恩来・張聞天の4位・12位への後退や彭德懷の末席と共に、毛の1強突出の局面と毛派の中樞占拠の趨勢を鮮明に現した。

「党祖・国父」神話の確立と呪縛

中共の歴史観では中国の近代は第1次^{あへん}鴉片戦争（1840.6.28～42.8.29）で幕を開けたのであるが、その終結の100年後に始まった延安整風は中共自身の現代史の起点・基点と見做せる。鴉片戦争で清朝（1644～1911）が英国に惨敗し世界近代史上初の不平等条約を呑んだ結果、中国は半封建・半植民地と化し107年後の中華人民共和国の成立で漸く独立できた。中共の第1次全党整風は毛沢東の絶対的な権威と神話めく^{イメージ}形象を作り上げたが、その呪縛は1党独裁の成否に関らず党が存続する限り投影し続けて行くであろう。鄧小平は伊太利^{イタリア}の報道人・作家ファラーチ（1929～2006）との^{インタビュー}面会取材（80.8.21・23）で、紫禁城の入口で見た毛主席の肖像画は今後も残して行くのかという劈頭^{へきとう}の質問に対して、疑問を許さぬ強い口調で「永遠要保留下去」（永遠に残して行く）と断言した。毛のある時期に犯した誤りを認め生涯の功罪を「7分功, 3分過」（7分の功績, 3分の過誤）と評した上で、中国人民は彼を党・共和国の主要な「締造者」（創設者）として永遠に記念して行く^{へきとう}と述べた。¹⁾「7大」（1945.4.23～6.11, 延安）の主席台（議長席）の後方の壁には、毛と最高指導部（書記処, 5人）内序列2位の中共軍創設者・総司令官朱徳（1886～1976）の像が掛っていたが、中共占領下の49年2月12日から天安門城楼の中央に掲げられて来たのは毛のみである。『礼記』（周〔前1046～前256〕末～漢〔西漢〔前漢, 前202～後8〕, 東漢〔後漢, 25～220〕〕の儒者の古礼に関する説を集めた儒教の經典, 西漢の学者戴聖〔生歿年不詳〕編）の「曾子問・坊記・喪服四制」に、「天無二日, 土無二王」（天に二日無く, 土に二主無し）と有る。小説家司馬遼太郎（本名福田定一, 1923～96）の歴史随想集の仮題『この^{くに}土のかたち』（『土』はNationやStateでなくLandを書きたい趣旨に由る）²⁾と、実際の『この国のかたち』（『文藝春秋』86年3月号～96年4月号）と結び付ければ、「土無二王」の「土」は原義の地上の他に国土とも解釈できよう。聖徳太子（名は厩戸, 574～

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方 (1) (夏)

622, 593年就位)が制定した「憲法十七条」(604)の第12条にも、中国で一般的な言う「天無二日, 民無二主」に近い「国非二君, 民無兩主」(国に二君^な非く, 民に兩主無し)が出ている。「一國二制度」ならぬ「一國二領袖」は無理だから毛だけが頂^{いただき}に坐るのは順当であるが、「民無二主」を振^{もじ}って言えば「一無自由, 二無民主」(一に自由無く, 二に民主無し)の独裁に変質したのが頂けない。被害者の鄧も国民に永遠の尊崇を唱えたから「党祖(造語)・国父」の影響は甚大であるが、「永遠」が非現実的な空言だとしても半永久な持続や永続的な伝承は有り得る。

司馬遼太郎の本名と同じ名前を持つ陸定一(1906~96)は「文革」の前夜に失脚し、政治局委員候補(6人中3位[就任時, 以下同じ])・中央書記処書記(10人中8位)・中央宣伝部長の解任と副総理(16人中13位)兼文化部長(大臣)の事実上の職務停止(66.5.23)の15日前から軟禁され、「隔離反省」の正式決定(9.30)を経て、68年5月23日に北京秦城監獄(要人・重要囚人専用の公安部看守[拘置]所)に入れられ、裁判・判決も無い儘「囚号(囚人称呼番号)68164」の身で78年12月2日まで監禁された。³⁾1975年12月11日の政治局決議で「階級異己分子(階級的異分子)」「反革命分子」「内奸嫌疑^{てきのまわしもの}」と断罪され、党中央同年第25号文件(文書)に由って「永遠开除党籍」(党籍を永久に剥奪する)の決定が党内外に伝達されたが、11期3中全会後の79年には6月8日の中央44号文件で名誉回復が為され、7月2日の政協全国委員会副主席の追加選出に続いて4中全会(9.25~28)で中央委員に追加選出された。⁴⁾第9期政治局の同じ委員候補(4人中2位)・河北省革命委员会主任(「文革」中の地方最高首長)の李雪峰(1907~2003)も、党内序列4位の政治局常委陳伯達(1904~89)の失脚(9期2中全会, 70.8.23~9.6, 江西省廬山)後、陳との癒着を疑われて中央召集の華北(党・軍責任者)会議(12.22~翌年1.24)で批判され、73年8月20日の中央決議で「林彪反党集团」の「主要成員」として党から永久に除名された。華北会議直後の8年に亘る自宅軟禁と安徽省某所の軍用倉庫での拘禁を経て、「10大」(1973.8.24~28)で承認された処分は82年4月1日の中央決定に由って取り消され、復帰措置として83年6月に政協全国常委と為り、85年の中共全国代表会議(9.18~23)で党中央顧問委員会委員に追加選出された。「文革」中の「永遠开除党籍」第1号は第7期中央副主席・国家主席劉少奇に他ならず、8期12中(拡大)全会(1968.10.13~31)で「叛徒・工賊(労働貴族)^{てきのまわしもの}・内奸」と認定され、党から永久に除名し党内外の全職務を「撤銷」(撤廃。解除)する決定が採択された。政治的な極刑を処された劉は監禁先で真面な治療を受けられず翌年11月12日に死去したが、誤った中央決議は11期5中全会(1980.2.23~29)で撤回された。中央決定・党首承認の除名の「永遠」は3年余り~11年余りしか続かなかつたので、指導者の口から出る「永遠」はどれぐらいの期間と効力を持つてあろうか。

1959年の廬山会議(8期8中全会, 8.2~16)で「彭(徳懐)黄(克誠)張(聞天)周(小舟)

反党集団」の頭目とされた彭は、国防部長を解任された一方、政治局委員（20人中14位）・副総理（16人中3位）は留任したが、第3期全人代第1回会議（64.12.21～65.1.4）で選出された内閣には入らず、8期11中全（66.8.1～12）の指導部改組で政治局からも落された。西南3線（後方戦備工程）建設第3副総指揮（3人中末席）に左遷された彼は「文革」初期、紅衛兵（青少年の「革命造反」組織・その成員）に北京に連行されて糾弾され、軍の施設に8年近く監禁された末に直腸癌の進行を放置された儘に非業の死を遂げた（1974.11.29）。中央直属の「專案組」（専門事案特別捜査班）は1970年7月19日の請訓報告書で、「反党集団頭目・里通外国分子」（反党集団の頭・外国内通者）の罪名を付け、党内外全職務解任・党籍永久剥奪・無期懲役の処置を建議した。審査を仕切る政治局委員・解放軍総参謀長・軍委辦事組組長（事務局長）黄永勝（原名叙全，1910～83，初代 [55.9.27 将帥合同授与] 上将 [55人中44位]）から最高指導部に上げられたが、毛は態度を表さなかった故に有耶無耶と為った。⁵⁾ 皮肉にも党・軍委副主席・副総理（序列1位）兼国防部長林彪（原名祚大，1907～71）は、夫人の葉群（原名静宜，政治局委員・軍委辦事組成員・林彪辦公室 [事務所] 主任，1917～71）等と共に、空軍専用機で謎の国外脱出をして蒙古域内の沙漠に墜落死し、黄を頭とする林派の「四大金剛」（四天王）も一網打尽で投獄された。「10大」直前に中央が批准した專案組の建議は、①「資産階級野心家・陰謀家・反革命両面派（風見鶏）・叛徒・売国賊」林彪の党籍永久剥奪、②「林彪反党集団主要成員」（以下同じ）の「国民党反共分子・托派（トロツキー派）・叛徒・特務・修正主義分子」陳伯達の党籍永久剥奪・党内外全職務解任、③「混進黨内的（党内に紛れ込んだ）階級異己分子・特務・叛徒・売国賊」葉群の党籍永久剥奪、④黄永勝・呉法憲（元政治局委員・空軍司令・副総参謀長・軍委辦事組副組長，初代中将 [全175人]，1915～2004）・李作鵬（元政治局委員・海軍第1政治委員・軍委辦事組成員・初代中将，1910～2009）・邱会作（元政治局委員・解放軍総後方勤務部部长・副総参謀長・軍委辦事組成員，初代中将，1904～2002）・李雪峰の党籍永久剥奪・党内外全職務解任である。首脳部の要人集団が中核を為す異端勢力に対する「撃墜」は毛の最後の死闘と為ったが、後継者も含む大勢の高官を打ち砕く猛威は帝の生殺与奪の特権と朝野の盲従に由来した。

興味深い事に彭徳懷・林彪の元帥（10人中2・3位）は剥奪されず、黄永勝・呉法憲・李作鵬・邱会作も軍籍・階級の剥奪が無いばかりか、秦城監獄等での服役と「林彪・江青反革命集団特別審判（裁判）」（最高人民法院 [最高裁判所]・最高人民検察院 [最高検察庁] 合同特別法廷，1980.11.20～81.1.25）に於いて、過去の戦功が若干の優遇や情状酌量の材料に為った。1989年11月30日に公表された中央軍委認定の33人の「中国当代軍事家」には、中共の「先軍」性質を現して毛沢東・周恩来・鄧小平が第1・2・4位を占めるが、3位の朱徳等の10人の元帥も全て入り林は政治的な理由で末席に在りながら含まれる。毛に次ぐ党・軍No.2の林と序列4位の同盟者から為る「林陳反党集団」の肅清で、第9期政治局の委員・委員候補25中8人

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方 (1) (夏)

も消え**権力構造の「軍縮」**に為った。「文革」中「永遠开除党籍」の10人中6人の軍人は全て政治局に居り、非軍人の内に劉少奇は林彪と同じく長年のNo.2で、陳伯達は「文革」発動・彭(真)陸(定一)羅(瑞卿)楊(尚昆)反党集団「肅清を決めた政治局拡大会議(1966.5.4~26)の後、28日設立した中共中央文化革命小組(指導機構)の組長(機構長)と為り、8期11中全で政治局委員候補(9人中8位)から常委(11人中5位)に特進し、中央委員から3段跳びしたNo.4(常委・書記処常務書記・中宣部部长・中央文革顧問・副総理[15位])の陶铸(又名際華, 1908~69)の失脚(67.1.10)に由って、党内序列が1位上がり「文革」前の自己最高の21位(56.9~58.5)から4位に昇った。対して陸定一・李雪峰の失脚時の序列は**政治局内の格差**を映す様に20位・22位と低く、李は中宣部長を2年間務め政治局に10年在籍し閣僚でもあった陸より更に格下で、1級行政区(日本の都道府県に当る省・自治区・中央直轄市・特別行政区)の長に過ぎず、同じ政治局委員候補でも当選から4年5ヵ月しか経っていないかった。「林陳反党集団」の所謂「篡党奪権(党を乗っ取り権力を奪う)・政変」と照らしても、李の「罪状」は**党籍剥奪に「永遠」を冠す「極悪重犯」とも思えないので引掛る。**

9期2中全会で「統帥」毛沢東と「副統帥」林彪の両派の間に正面激突が起り、李雪峰は反毛派の攻撃が最も激しい華北組(広域分科会)の召集人(世話人)を務めた関係で、**どの派閥にも属さず賛否の態度も示さぬにも関わらず内訌・外圧の迸りを受けた。**国民経済計画・戦争準備と並んで全会の議題に有る憲法改正の議論では、劉少奇解任後に空席と為った国家主席の職位の存廃を巡って対立が生じ、存続及び毛の就任を望む意向は林派だけでなく中央委員会等の大勢から支持されたが、儀礼的な公務を嫌って1959年4月27日に第2期を劉に譲った毛は高齡の為**尚更固辞し、他者の就任を許し難い心理**からか廃止論の一点張りであった。国家元首を設け党の領袖・軍の統帥をそれに推戴するのは、**国際社会の常識と党・軍・民の衆意に沿う事**であり、開会前日の政治局常委会でも林彪・周恩来・陳伯達・康生の存続・推戴論に対して、毛は初めて自分しか居ない**絶対少数の立場**に置かれた。「9大」採択(1969.4.14)の党規約の第5条は「党的組織原則是民主集中制。」(党の組織の原則は民主集中制である)、「全党必須服従統一的紀律：個人服従組織，少数服従多数，下級服従上級，全党服従中央。」(全党は統一した紀律に服従しなければならない。即ち、個人は組織に服従し，少数は多数に服従し，下級は上級に服従し，全党は中央に服従する)と定めている。毛は「中国共産党在民族戦争中的地位」(民族戦争に於ける中国共産党の地位, 1938.10.14)でこの4つの服従を「重申」(再度表明)し、「誰破壞了這些紀律，誰就破壞了党的統一。」(此等の紀律を破る者は，党の統一を破壊する者である)と言い切った。曾て朝鮮戦争(1950.6.25~53.7.27)初期の10月1日に韓国軍が38度線を越えて北進した直後、朝鮮の労働党党首・民主主義人民共和国首相金日成(1912~94)から出兵支援の緊急要請が来た時、毛は2日の書記処会議と4~5日の政治局拡大会議で反対・懐疑の多数意見に対して、**国家安全の為の参戦の必要性を力説し鍵と為る彭德懐の支持を得て**

可決を取り付けた。官製評伝『毛沢東伝（1949—1976）』（中共中央文献研究室編、^{ほう}逢先知・金沖及主編〔編集主幹〕、上・下2巻、中央文献出版社、2003）では、「抗美援朝」（米国に抗して朝鮮を支援する）は一生の中で最も困難な決定の1つだとし、充分な理由と忍耐力を以て説得できた事は、「是一個何等艱難的、又何等民主的決策啊！」（何という艱難で、又何という民主的な意志決定であろう！）と感嘆符付きの礼賛をしているが、20年後の廬山で政治局常委・中央全会の多数を占める反対意見に対して、独裁的に為った彼は理性的な思考と「遵紀守法」精神が影も形も無くなった。

中央委員155人・委員候補100人が出席し毛沢東が司会する初日午後の全会では、林彪は予定に無かった1時間余りの講話で国家元首を設置し毛主席を推戴しようと称え、康生も賛成の上で若し毛主席が国家主席に為らないなら林副主席に為って戴こうと言った。毛は厚い信頼を寄せて来た康の同調を見て不快になり即座に散会を宣言したが、周恩来が召集し各地域別会議世話人が参加する夜の政治局拡大会議では、呉法憲の提案に由り地域別会議で先ず2日間掛けて林の講話を学習する事が決定された。翌日の地域別会議では午前に講話の録音を2回聴き午後^{グループ}に討論したが、華北・西南・中南・西北組で陳伯達・呉法憲・葉群・李作鵬・邱会作が同時多発的な攻勢を起し、毛主席の謙虚さを利用して国家主席の設置に反対する者を引き摺り出そうと煽動した。華東・東北を含む全6地域別会議の中で陳伯達が跳梁する華北組が一番激烈で、半ば失脚中の陳毅（副総理〔序列5位〕兼外相・軍委副主席〔7人中4位〕、元帥〔6位〕）までが、「狂妄の極端的反革命分子」（狂妄極まり無い反革命分子）の陰謀は絶対に許せず打倒すべきだと嘯いた。政治局委員候補（末席の4位）・中央辦公庁主任（事務総長）・中央警衛局党委第1書記汪東興（1916～2015、初代少将〔全1370人〕）も、8341部隊（中央警衛団〔聯隊〕）を代表して国家主席の設置と毛の就任を擁護したが、毛の側近中の側近を領袖の代弁者とする向きが多い為その発言の影響も大きい。一連の発言を記載した華北組の第6号簡報（速報）が翌朝の地域別会議で配布されると、「野心家」摘発を求める声が一層高まり全会は「批闘」（吊し上げ）の場に化しつつあった。標的と為る張春橋（1917～2005、政治局委員・上海市革命委員会主任）は恐怖に慄き、昼に毛夫人・政治局委員江青（原名李雲鶴、又名李進、1914～91）に連れられて毛に庇護を哀願した。毛は激怒して林講話の学習の中止、華北組第6号簡報の回収、全会の休会、国家主席設置の棚上げを命じ、5日に及ぶ休会期間中に毎日12時間ほど自ら異見者の切り崩しに奔走し、再開時に「我的一点意見」（私の僅かな意見）と題する論評で陳伯達を糾弾し、国家主席を設けない憲法改正案の採択で彼の建国後最大級の政治的な危機を乗り越えた。⁶⁾

「偉大・光栄・正確」と「立德・立功・立言」

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方 (1) (夏)

毛沢東は1960年10月22日に米国の報道人・作家スノー（1905～72）と再会した時、これまでの人生の中で一番暗黒な時は何時だったかと訊かれ、長征の途中で紅1・4方面軍（数個軍団を統括する軍の最大編制組織）合流後の張国燾（又名〔別名〕特立・凱音，1897～1979）との闘争だと答えた。「中華蘇維埃共和国」（1931.11.7成立，長征後「中華蘇維埃人民共和国」〔中華蘇維埃民主共和国〕の改称を経て37.9.22終結）の「首都」瑞金から脱走した1方面軍（中央紅軍）は、国民党軍の攻囲・追撃を突破して35年6月12日に四川省懋功で4方面軍と合流したが、当初10万人居た兵員が1万人しか残っていない為4方面軍の8万人に大きく見劣りした。1方面軍（中央紅軍）は文字通り党中央・軍委が所在する第1の主力であり、党首の張聞天と中共軍最高指揮者・「蘇維埃共和国臨時中央政府」主席の毛を擁していたが、毛も「鉄砲から政権が生れる」と言うので**実力に応じる権勢の再分配を迫られた**。4方面軍総帥の張国燾は中共初代指導部（3人から成る中央局）の組織主任で、党内序列が毛の上に在る期間が長い上に本拠地の利と人数の優勢を占めており、その為7月18日の政治局常委会議で数人の部下の政治局・軍委入りを要求した。毛側は**指導部内の多数確保を譲らず**大量増補を拒否する一方、中央革命軍事委員会主席朱徳の紅軍総司令兼任を継続する前提で、周恩来の紅軍総政治委員を張に譲渡した。間も無く進路を巡って毛の北上志向と張の南下方針の対立が先鋭化し、張は9月9日に秘かに部下に打電し南下及び党内闘争の徹底的な展開を命じた。毛は4方面軍系統の右路軍前敵（前線対敵作戦）指揮部参謀長葉劍英（原名宜偉，1897～1986）の密告を受けて、**党の分裂と軍の内訌を避ける**為に当夜に軍委縦隊（軍〔日本語＝「軍団」〕に相当）を率いて張の勢力圏から脱出した。張は10月5日に南下先の四川省理藩県で別の「中共中央」を立ち上げ、毛・周恩来・博古・張聞天に対する職務停止・中央委員除名・党籍剥奪・指名手配、1方面軍紅3軍団（数個軍を統括する編制組織）政治委員楊尚昆（1907～98）・葉劍英に対する解任・「査辦」（査問・処罰）を宣言したが、「共産国際」に承認されず「**名不正→言不順→事不成**」の帰着で翌年6月6日に解散した。政治・軍事の失敗を喫した張は紅1方面軍と再合流した10月から権勢を失い、中共根拠地と為る中華民国陝（西）甘（肅）寧（夏）辺区（1937.9.6設立）政府副主席在任中の38年4月3日に国民党陣営に身を投じ、周恩来が脱出先の武漢に赴いて説得しても翻意しなかつたので同月18日に党から除名された。**中共の内争の激しさと毛の権力奪取・防衛力の強さを示す様に、この2人の創設成員は互いに相手の党籍を剥奪し張が敗北した**。第1次国（国民党）共（産党）内戦（中共側の名称は「第2次国内革命戦争」「土地革命戦争」，1927.8.1～37.8中旬）・抗日戦争（37.7.7～45.8.15）・第2次国共内戦（同＝「第3次国内革命戦争」「解放戦争」，46.6.26勃発）を経て、**中共は建国まで21年に及ぶ全面戦争を強いられた**。党の中枢・軍の主力が壊滅の危機に瀕した事態や、毛が国民党の爆撃や暗殺計画で命を落しそうになった事も有るが、張国燾との闘いを最も暗黒な1頁としたのは脅威の深刻さを物語る。警句の「明槍易躲，暗箭難防」（見える槍は躲し易く、見えぬ箭は防ぎ難い）

とも通じて、彼は国内外の敵軍の攻撃よりも党内の政敵の「暗算」(騙し打ち)を危惧していた。

劉少奇・周恩来・彭徳懐・康生・葉劍英と同年生れの小説家横光利一(1898~1947)は、中共のお家騒動の最中の35年8月9日~12月31日に『東京日日新聞』『大阪毎日新聞』に『家族会議』を連載した。東京対大阪の株式仕手戦と恋愛が絡み合う悲劇を描いたこの長篇の科白に、「どうしてこのやうに一難去るとまた一難と、次から次へと順序を狂はさず苦しきは来るものか」と有る。これが語源と為る「一難去って(去ると)又一難」「一難去れば一難来る」に当る中国の熟語は、「一波未平、一波又起」(1つの波が収まらない内に、次の波が又起る)と言う。第2次天安門事件を招来した民主化運動は「反革命暴乱」と断罪された後、江沢民時代に「動乱」→「政治風波」と2段階で調子を和らげたが、両者合成の「風暴(嵐)・波乱」は毛沢東時代の表徴とするのに正しく適している。朝日新聞社は今上天皇(明仁、1933~)の退位が2019年4月30日と為った事を受けて、18年春に平成(89.1.7改元)の時代認識や憲法に就いて訊ねる全国世論調査を行ったが、平成とはどんな時代かを8つの選択肢から2つまで選んでもらうと、上位2項は「動揺した時代」(42%)と「沈滞した時代」(29%)で、以下は「進歩的な時代」25%、「保守的な時代」21%、「安定した時代」19%、「暗い時代」9%、「活気のある時代」6%、「明るい時代」5%という結果が出た。泡沫経済崩壊(1991.3~93.10)後の「第2の敗戦」「失われた20年」を考えると、負の形象の突出は世相と国民感情の両方に合致すると言えよう。平成で一番印象に残る世の中の出来事を自由回答で1つだけ挙げてももらった処、東日本大震災(2011.3.11)や阪神淡路大震災(1995.1.17)等の「自然災害」が首位の52%を占め、次に「オウム真理教関連の事件」(89.2~95.5)7%、「東京電力福島第1原発の事故」(11.3.11)4%等があった。阪神大震災の直後にオウム真理教に由る東京地下鉄サリン無差別大量殺傷事件(3.20)が起き、東日本大震災に由って東京電力福島第1原発の事故が発生したので、天災と人災の同時多発や相乗的な騷擾が印象付けられ、中国流で言う「福無双至、禍不单行」(福は重ねて来ず、禍は単発に止まらない)の通りである。今回の調査は全国の有権者から3千人を選んで郵送法で実施(3.14調査票発送)したが、返送(4.25締切)総数の2016と有効回答数の1949は、奇妙にも習近平「核心」誕生と中共建国の西暦年に当るので、中華人民共和国史上最長の毛沢東時代に対する歴史認識に思いを巡らす契機と為る。

過去を振り返る時代認識は現状に対する見方や未来への期待にも繋がるので、官製史観以外の異見を容認し難い同時代の中国の輿論管制の下では、否定的な見解が多数有るはずの左様な調査は先ず企画が通れないし、実施できるとしても回答者が簡単に特定される恐れから返送率が低いであろう。思うに、長さが平成の9割に当る毛沢東時代は変化に富んだ故3期に分けられ、前期は建国から「反右派闘争」の決断(1957.5.15)までの7年7ヵ月余りで、恰度9年に亘る中期を経て、後期は「文革」発動~毛死去(66.5.16~76.9.9)の10年4ヵ月弱である。其々1語で締め括るなら「動蕩」(激動)・「受難」と「狂乱」が思い及び、更に27年間を1

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方 (1) (夏)

言で纏めるなら「多難」が無難かと思われる。スノーが訊いた党首の最も暗黒な時とは逆の党の最も輝かしい時期を求めるなら、建国の直前・直後と「第2の開国」なる改革・開放の初期が挙げられよう。中南海（党中央・國務院所在地，党・国家指導者居住区）の正門である新華門の両側に、「偉大的中国共産党万歳」（偉大な中国共産党万歳）・「戦無不勝的毛沢東思想万歳」（百戦百勝の毛沢東思想万歳）の標語が掲げてある。前者の修飾語は「偉大、光荣、正確的」（偉大で、栄光有る、正しい）の略であるが、20世紀に公開された金正日の唯一の肉声の「英雄的朝鮮人民軍将兵諸君に栄光有れ！」（建軍60周年記念閱兵式、1992.4.25）を思い起せば、**偉業・栄誉と無謬・無敵を謳う「軍先」党・国の同根性が浮び上がる。自画自賛の「偉・光・正」（略語）が最も実情に合うのは「解放戦争」の終盤**であり、中共軍は第2次内戦開始時の兵員の1:3.5の劣勢から2年で1:1.3まで差を縮め、遼（寧）瀋（陽）战役（国民党側の名称は「遼西会戦」、1948.9.12~11.2）・淮海战役（同＝「徐〔州〕蚌〔埠〕会戦」、11.6~49.1.10）・（北）平〔今の北京〕（天）津战役（同＝「平津会戦」、11.29~1.31）の連勝で完全に逆転した。敵軍殲滅数最多（55.5万人）の淮海战役を総前敵委員会書記として指揮に当たった鄧小平は、1984年3月25日に中曽根康弘（1918~ ，第71~73代首相〔82.11.27~87.11.6〕）との会見で、80年も中国革命の為に献身して来て、最も嬉しかった事と苦しかった事は何かを訊かれた時、一番嬉しかったのは解放戦争の3年間で、その時我々は装備が非常に劣っているが、弱を以て強に対抗し、少を以て多に勝つ具合で勝ち続けた、一番苦しかったのは勿論「文革」の時だと答えたが、毛沢東治下の27年は無敗・無謬神話が次第に崩れ終いに完全に破綻した時代と思える。

毛沢東は最期の1年に自分の古い写真を何度も見入り、特に懐かしんだのは1942年に延安の中国人民抗日軍事政治大学（中国抗日紅軍大学〔36.6.1成立〕より37.1.19改称）で講義する場面、47年に陝西北部を転戦中の騎馬行軍の姿である。1976年に新作映画『難忘的戦闘』（忘れ難き戦い。湯曉丹監督、上海映画製作所）の鑑賞で、49年に某都市を攻略した解放軍が進駐車で市民の熱烈な歓迎を受ける場面を見て、**往年の栄光と今日の衰微の落差**からか感極まって嗚咽・号泣し、世話係が已むを得ず放映を中断し彼を支えて寝室に戻した。7) 毛の著作の白眉は抗日戦争初期に執筆した「実践論」（1937.7）・「矛盾論」（同8）とされ、抗日軍政大学で講演した「両論」は内外で名高いが、本人は抗日戦争勝利~建国の間の著述の方が殊にお気に入りであった。「実践論」は1950年12月29日の中共中央機関紙『人民日報』に掲載される前、同月のソ連共産党中央委員会理論誌『ボリシェヴィキ』で先に発表された。ソ連の第2代首領（1922~死去）スターリン（1879~1953）の称賛・提案も有って、毛は建国直前から自著選集の編纂・校閲に着手し、朝鮮戦争第3战役（50.12.31~51.1.8）の勝利（漢城・仁川）後の集中作業に由って、51年10月12日に『毛沢東選集』（中共中央毛沢東選集出版委員会編輯）第1巻が人民出版社（北京〔以下、日本の場合と同じく首都に在る出版社の所在地は略す〕）よ

り刊行された。儒教の五経（尊ぶ5点の経典）の内の『春秋』（孔子が魯国の記録を筆削したと伝えられる年代記、前480頃成立）の注釈書『春秋左氏伝』（伝・春秋時代〔前722～前481〕の歴史学者左丘明〔一説に姓は左丘、名は明、生歿年不詳〕著）に、「襄公二十四年」の記述として「太上有立德，其次有立功，其次有立言。雖久不廢。此之謂不朽。」（太上は徳を立てるに有り，其の次は功を立てるに有り，其の次は言を立てるに有る。久しと雖も廢せず。此を之不朽と謂う）と有る。魯襄公（姫午，前575～前542，前572就位）24年（前549）の恰度2500年後の『毛選』出版は，正に「三不朽」の「立德・立功」に次ぐ「立言」の盛事である。第1巻と第2・3巻（1952.4.10，53.4.10）は25年10月～45年8月の代表作を収録しているが，彼はこの3巻には余り興味が無く読み返したい物は数篇しか無いと言った。その代りに第4巻（1960.10.1）所収の解放戦争の著述には並々ならぬ偏愛を持ち，蒋介石と「針鋒相對，寸土必争」（真っ向から對抗し，1寸の土地をも必ず争う）故の氣勢を自ら高く評価した。「抗日戦争勝利後の時局と我々の方針」（抗日戦争勝利後の時局と我々の方針，1945.8.13）と「關於重慶談判」（重慶談判に就いて，45.10.17）は，最終校閲の時に満悦の笑いを漏らすほど会心の作と見做された⁸⁾が，抗日戦争初期の「(実践・矛盾) 両論」や「論持久戦」（持久戦を論ず，38.5.26～6.3）等と共に，毛の好著は20世紀前半に頻発した戦争や暴力革命の所産が多い。高度の緊張感と強烈な闘志から湧き上がった智慧と表現は，能く思想的な魔力を帯び文学的な精彩を放ち，党・軍の奇跡的な存続・戦勝と共に毛の神話形成の一因を為した。

毛沢東の故郷を題材とする讃歌「瀏陽河」（徐叔華作詞，唐璧光作曲，1951）に，「江辺有個湘潭県，出了個毛沢東世界把名揚」（川辺に湘潭県が有り，毛沢東が現れて，世界に名を揚げた）と有った。「毛沢東」「世界把名揚」は後に「毛主席」「領導人民得解放」（人民を解放に導いた）に変えられたが，内外に名を轟かし，歴史に名を刻むという二重の「伝世」（世間・世界に伝え，後世に伝承させること）は，中国の「名の文化」の至高の志向，中国の傑物の究極の願望と言える。毛の英名を初めて海外に広げたのはスノー著 *Red Star over China*（1937）であり，前年に外国人記者として初めて延安入りした彼が描いた「中国の赤い星」（和訳題）は，国際社会及び国民党支配地域に於ける中共と毛への理解・共感を大きく促した。35年後の江青も夫君に肖って米国の著述家に伝記を書かせたい魂胆も有って，1972年8月25～31日に米国の紐育州立大学ビンガムトン校（46年設置）准教授ワイトケ（1938～）の7日連続・60時間余りに及ぶ面会取材を仕組んだ。個人史を語り捲り機密資料の提供まで用意した売名行為は周恩来に由って中断され，米国で出版した *Comrade Chiang Ch'ing*（江青同志，1977）も大きな反響を起さなかったが，奇しくも毛夫妻の氏名を1字ずつ持つ江沢民も完全引退（国家軍委主席退任，2005.3.13）の直前の同年元日に，米国の投資銀行家クーン（1944～）著 *The Man Who Changed China : The Life and Legacy of Jiang Zemin*（中国を変えた男——江沢民の人生と名残）の英語・中国語版（談暉・于海江訳『他改變了中国：江沢民伝』，上海訳文

出版社)の同時期発行に由って、「名残」の字・義の通り名を残す精神的な遺産 (legacy) を置く事が出来た。習近平は隔世遺伝の様に在任中に準官製 (「官方准许」[当局認可]の意も兼ねる) 伝記を出させるか、実現する場合の推進体制・著者選定・使用言語・刊行時期・記述内容も含めて興味を引く。任期を全うした建国後の党首は例外無く「功成名就」(功を成して名を遂げた)と言え、『江沢民政選』の出版(全3巻, 人民出版社, 2006.8.10 [80歳に為る7日前])も名声確立の証であるが、在任中『毛沢東選集』4巻も刊行した「建国の父」には誰も敵わない。第4巻は直後のスノーの質問に有る「暗黒な時」を振って言うと、毛の「高光時刻」(highlightの中国語の直訳)の展示の趣も有るが、彼が集中編集・校閲を行った同年2~3月は共和国史上初の全国規模の暗黒時代である。開關以来1国の単年度餓死者数を記録した大飢饉に負うべき毛の責任は、選集の発行で増幅した領袖及びその思想の無謬性の神話に由って追究されず、1959~61年のこの国難を遥かに上回る「文革」の大災厄の遠因と為った。

「なごり」の別の当て字の「余波」に因んで米人著江沢民政の余波に触れると、中共人物伝記の第一人者である作家葉永烈(1940~)は本著への不満から、自分は「001工程」として立案された党中央対外宣伝機構の局長の要求に応じて2001年頃に協力したと暴露した。党史に疎い米国の著名人を最善の執筆者とし未公開情報の提供等の便宜を与えたのは、世界に名を揚げるのに好都合な安排と効率的な取引の様に思えるが、葉を共著者にせず協力者と位置付けた事で提携が破談に為った事⁹⁾は、斯界の権威者が禁域に踏み込み不都合な真実を明かす事を回避できる利点の半面、在任中の個人崇拜醸成の極秘工作が苦情を招来し表面化した不利益も大きい。「人過留名、雁過留声」(人は立ち去ると名を留め、雁は飛び去ると声を留む)と言う様に、中国では古来「青史留名」(青史に名を留める)願望が異様に強い。初唐(618~712)の詩人劉希夷(651~79頃)の名句「年年歳歳花相似、歳歳年年人不同。」(年年歳歳花は相似たり、歳歳年年人は同じからず)を巡って、自分の作品にして欲しいという母方の叔父(年少)宋之問(一名[別名]少連、656頃~713頃)の所望を断った為、宮廷詩人の名声にも満足しない貪婪な宋の怒りを買ってその下僕への指図で撲殺された。文人の間でも名を巡る攻防は「腥風血風」に塗れる事が有るから、埋没に甘んじない葉の反応は作中の政界要人等とも似た権利防衛の主張と言える。彼は2008年に『鄧小平改變中国——1978:中国命運大転折』(鄧小平, 中国を変える——1978:中国の運命の大転換)を江西人民出版社より刊行し、6年後に四川人民出版社で新版(副題は『從華国鋒到鄧小平』[華国鋒から鄧小平へ])を出した。『江沢民政選』中国語版の『他改變了中国』(彼は中国を変えた)への意趣返しとも取れるが、江は鄧と比べて党首・国家主席を務めた点、軍委主席在任年数が長い点で上回るが、所詮鄧の敷いた軌道に沿って走行し、鄧が変えた中国を大きく変えていない。平時の指導者は行方事の規模に於いては到底乱世の毛沢東・鄧小平と肩を並べ難く、超越しようとするればその失敗を避けて真の「偉大・光栄・正確」を追求しなければならない。

青史に名を留める殊勲への挑み

鄧小平が後世に毛沢東より高く評価されて行くに違い無い功績として、改革・開放の「総設計師」として国家再建・経済発展を強力に推し進めた事の他、毛への盲従を断ち切り「文革」を否定し「文革」再演の予防策を講じた事も大きい。「12大」採択の党規約の第二章「党の組織制度」の内の第十条（六）は、「党禁止任何形式的個人崇拜。要保証党的領導人的活動處於党和人民的監督之下，同時維護一切代表党和人民利益的領導人的威信。」（党は如何なる形式の個人崇拜を禁止する。党の指導者の活動が党と人民の監督の下に置かれるよう保証すると共に、党と人民の利益を代表する全ての指導者の威信を維持・保護しなければならない）と定めているが、個人崇拜に対する完封こそが「禍匣」（パンドラの箱）に対する施錠である。「崇拜」は『広辞苑』で「①あがめうやまうこと。②〔宗〕(worship) 宗教的対象を崇敬し、これに帰依する心的態度とその外的表現との総称」の両義と為り、其々「“英雄—” “舶来品—”」「“神を一する”」の用例が付く。『日本国語大辞典』第2版（日本国語大辞典第二版編集委員会・小学館国語辞典編集部編、本文13巻+別巻1冊、2000~02）では、「㊦あこがれの気持で、ある人を心から敬うこと」に、「将来之日本（1886）〈徳富蘇峰〉九」等3点の和文出処と「南齊書—百官志」の典拠が引かれ、「㊧宗教的対象の前に立ち、自己の有限性、依存性、卑小性、無力性を自覚したり、あるいは自己の罪業の深さとその自力による救済不能を自覚したりすることから、宗教的対象に自己の救済一切をまかせ願求する心をもって、対象を敬いあがめること」に、「公議所日誌—一五中・明治二年（1869）五月」等2点の出典と、[語説]の説明の「中国では近代になって、英華字書で、adore, adorerの訳語にあてられ、宗教的意味合いが加わった。日本では明治までに用例が確認できず、中国の洋学書、漢訳聖書と共に日本語に入ってきたのではないと思われる」と有る。㊦より㊧が早く日本語に入ったのは些か奇妙であるが、『現代漢語詞典』第7版（中国社会科学院語言研究所詞典編輯室編、商務印書館、2016）の「[勳]尊敬欽佩：～英雄人物」（[勳]尊敬・敬服する。「英雄的人物を崇拜する」）は、adore（[人]を[神の様に]敬愛する）と比べて心酔・傾倒の度合が少し弱い。adorerに当る「崇拜者」（『日本国語大辞典』の語釈は「〔名〕なにかを崇拜している人。崇拜家」, 用例3点の初出は「小春[1900]〈国木田独歩〉四」）が中国語に逆輸出された半面、「個人崇拜」は『日本国語大辞典』に無いので中国的な概念と為る。

Adore から idol（[1] 崇拜される人 [物]。憧憬の対象。[2] 偶像。偶像神。邪神）を連想するが、『広辞苑』の「アイドル [idol]」の項は「①偶像。→イドラ。②あこがれの対象者。特に、人気のある若手タレント。四迷、浮雲“此方はその一の顔が視度いばかりで”。“一歌手”」である。一般的に使われている②は中国語の「偶像」の用法にも有るが、「人気者。特に青少年

年の支持する若手タレント」(第6版の②の後半部分)は和製語義である。『日本国語大辞典』の【アイドル】の「(英idol “信仰の対象としての偶像, 神像”の意)《アイドル》崇拜される人, 物。あこがれの的。現在では多く, 熱狂的なファンを持つ若い歌手, 俳優などにいう。*浮雲(1887~89)〈二葉亭四迷〉二・七“彼(あの)娘ばかりには限らない, どんな美しいのを視たっても気移りしない。我輩には『アイドル』(本尊)が一人有るから” *それから(1909)〈夏目漱石〉一三“広瀬中佐は〈略〉当時の人から偶像(アイドル)視されて, とうとう軍神と迄崇められた” *漫談集(1929)見習諸勇列伝の巻〈徳川夢声〉“前者は年増に君臨し, 後者は娘のアイドルとなった”」は, 日本の近代文学の出発点と為る長篇小説が初出で後に芸能界へと重点領域が移った事も興味深く, 「信仰」「偶像」「神像」「熱狂的」「若い」「本尊」「軍神」「君臨」等も示唆に富む。和製漢語の「本尊」は『日本国語大辞典』では, 「〔名〕①寺院・仏壇などで中央にまつられ, 信仰・祈りの主な対象となる仏像。また, 個人が特に信仰する仏。本尊仏。②事件の中心人物。当人。本人。物や事象についても用いられる」と為り, 後者の用例(3点)の2番目の「東京新繁昌記(1874-76)〈服部誠一〉三・新橋鉄道“実に開化の本尊, 文明の始祖と謂って可なり”」の様に尊ぶ意であるが, 『広辞苑』の両義中の「②(多く“御一”の形で)本人・当人をからかいの気持をこめていう語。“当の御一は何も知らない”」は, ^{デンマーク}丁抹の代表的な詩人・作家(1805~75)の翻案(37)で世界的に有名な童話を連想させる。^{スペイン}西班牙の王族マヌエル(1282~1349)の寓話集(35)に有る原型は500年後, 「裸の王様」(『広辞苑』の説明=「[アンデルセン作の同名の童話の主人公から]高い地位にあって周囲の反対がなく自分の思いがすべてかなうため, 自己を見失っている気の毒な人のこと」)の決定版が出来た。個人崇拜で神像・本尊並みに神格化された君主は晩年のスターリン・毛沢東の様に, 虚妄の「皇帝の新しい服」(丁抹語原題と英訳*The Emperor's New Clothes*・漢訳「皇帝の新衣」の意)に取り憑かれ, 官・民全体の盲目的な順従の上に^{あぐら}胡坐をかき半ば「暗愚の雲上人」と化した。

『広辞苑』の「タレント【talent】」の「②才能。技量」に由来した「③(才能のある人の意から)芸能人。テレビ・ラジオなどの職業的出演者」は, talentの「(生れ付きの, 主に芸術的な)才能」「才能有る人(音楽家・俳優等の他に実業家等に就いても用いる)」と比べて稍狭義的である。中国語の音訳兼意識の「達人」(dárén)は『現代漢語詞典』で, 「**図①**〈書〉通達事理、樂觀豁達、行事不為世俗所拘束の人。**②**在某方面(學術、藝術、技術等)非常精通の人; 高手: ~秀 | 手藝~ | 数碼~ | 時尚~。」(**図①**〈書 [面・文章語]〉事理に通曉し, 樂觀的・豁達で, 行動が世俗に囚われない人。**②**ある方面[學術・藝術・技術等]に非常に精通する人。名手。「達人見世物」「携帯電話の達人」「デジタル通」「流行の通」)と説明・例示されている。『広辞苑』の「[左伝昭公七年] ①學術または技芸に通達した人。達士。“劍の一” ②広く物事の道理に通じた人。人生を達観した人。徒然草“一の人を見る眼は少しも誤る所あるべからず”」

も一緒であるが、中国の②は和製語義（初出用例＝両義合併と為る『日本国語大辞典』の用例7点中の5番目の「歌謡・松の葉 [1703] 序」）の逆輸入である。4点の用例は**新語の使用頻度と情報通信技術等の時流への関心の高さを窺わせるが**、「達人秀」の「秀」（xiù）は「表演；演出」（演技 [する]。公演 [する]）の意で、用例の「作～ | 時装～ | 泳装～」（「公演する / [販売促進・選挙活動等の為の] 見世物 [展示・宣伝等] を行う / 見せ掛けの態度を見せる」^{ファッション・ショー}「流行服装見世物」「水着見世物」）の後の「[英 show]」の通り、日本発→台湾流行の影響を受けて大陸で2000年代以来流行・定着に至った準外来語である。『広辞苑』の「ショー【show】」は「(示す意) ①人に見せるための催し。見世物。興行。②軽演劇。寸劇。③展示会。発表会」の多義で、①③に其々「ワンマン・ー」「ロード・ー」「モーター・ー」「ファッション・ー」の例が出る。「ワンマン・ショー【one-man show】」は「①舞台やテレビ番組などで、一人が中心になって演ずるショー。②転じて、大勢の中の一人が、まるですべてを一人でしているかのように目立つこと」であるが、和製漢語「独演」（＝「演芸・講演などを一人だけで通して行うこと。また、その演芸・講演。“落語一會”）と異なる「突（凸）演」（造語、突出した個人の「表^{パフォーマンス}演^{ショー}」）は、昨今の中国に有り触れた「政治秀」の至高の主演を為す習近平の形容に用い得る。

中共の党大会では第7回（1945.4.23～6.11）から政治報告を行う定型が確立し、報告及びこれに対する審議・採択は時系列で第1の重要事項・議題と為るが、異論や提案に応じて重要な修正を加えた例は余り無いので上意を拝聴する儀式的観が強い。前期の活動を総括し今期の指針を提示する報告は自ずと長大な物であるが、習近平は「19大」の初日に華國鋒の「11大」報告以来40年中最長の203分も費やした。朝日新聞中国総局著『核心の中国——習近平はいかに権力掌握を進めたか』（朝日新聞出版、2018）第4章「進む一強支配 二〇一七年一〇月」の第3部分「党大会開幕」第1節「異例の演説」に曰く、1期目にして「核心」の地位にまで上り詰めた実績がそうさせるのか、習は初めての舞台上で自信を漲らせて語り続けた。「会場がざわつき始めたのは、報告が始まって一時間半を過ぎたころだった。前回、胡の政治報告はおおよそこのころには終わっていたが、習の報告は一向に終わる気配がない。胡が一〇年前の演説で費やした二時間二〇分を過ぎると、記者席から“いつまで話すつもりなんだ”との声が出始めた。/それでも習は、水を飲む間さえ惜しむかのように話し続けた。トイレを我慢できないのだろうか、壇上でも中座する党代表の姿がちらほらと現れ始めた。議長団の最高齢で一〇〇歳になる元政治局常務委員の宋平は、杖をついて壇上から降り、二〇分ほど中座した。/結局、習の政治報告は原稿にして三万二千字、実に三時間二三分を費やす前例のない長大なものになった。」前回・前々回の胡錦濤報告の所要時間を越えた処で報道陣が敏感に反応した事は、**前党首の常識的・抑制的な流儀と著しい対照を為す「習近平特色」**^{カラー}が現れた^{ゆえん}所以である。安倍晋三首相（1954～，第90・96～98代 [2006.9.26～07.9.26, 12.12.26～]）が、初就任の10
98（98）

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方 (1) (夏)

周年に当る日の衆議院本会議に於ける所信表明演説で自衛隊員等を讃え、自民党議員が同調して起立・拍手した事に関して、曾て同会議での演説の原稿に「(拍手)/(水を飲む)」の指示書きが有った事が蒸し返された。¹⁰⁾ 10月11日の閣議で今回に就いて「御指摘の事実はない」とする答弁書が決定されたが、『週刊新潮』(新潮社)2013年3月14日号の写真頁記事「順風満帆!? 安倍晋三総理の“見せ方”と“見方”」に、施政方針演説(2.28)の原稿に問題の文言が書かれた頁の遠距離撮影の拡大写真が出ている。写真週刊誌『フライデー』(講談社)等を含む大衆誌に由るこの種の暴露が許された事も、首脳の演説原稿に演技指導や同頁の「感謝の意を表あらわそう」の類の発音表記が付けられた事も、**当局の情報規制が異様に厳しく指導者の自尊心が人百倍**(「人一倍」を振った造語) **強い中国**では想像に難い。水を飲む時機まで定めるのは日本的な痒い処へ手が届く小さな親切と言えようが、筋書通り動いた首相は別に官僚の操り人形ではなく必要な水分補給をただけである。水を飲む間さえ惜しむかの様に映った1歳年上の習の大演説は逆の意味で奇異に思え、2338人(代表2280人+特別招待代表74人中16人欠席)が集まる晴れ舞台上、内外の報道機関も含む注目の中で輝きを一身に集めた党首の熱演は**最早伝説と化している**。

鄧小平と1字重なる習近平の名前は平和・平安・平穩を望む国民性の現れと見做せ、幼少期の両親友の名も1950年代の「保衛和平」(平和を護る)の合言葉から取っている。彼は「文革」初期に在籍中の八一学校が「高級幹部子弟学校」として解散された後、劉震(原名幼安, 1915~92, 初代上将[31位], 空軍副司令員・新疆軍区司令官等歴任)の息子劉衛平(1957~)と共に北京第25中学に移り、同じ班の聶衛平(1952~)と意気投合し25中の「三平」と呼ばれた。紅衛兵の武闘に巻き込まれて習・聶が素早く逃げ劉が殴られて脳震盪と為った事もあるほど、「難兄難弟」(艱難を共にした仲間)と言える「髮小」(幼馴染)である。劉は**習体制第1期の旧知重用**の中で低位の総後勤部副参謀長・少将に止まったが、聶は囲碁棋士の道を選び1982年に初代九段(專業の最高位)の3人中の首位と為り、88年3月26日に中国初の「棋聖」の称号を中国囲碁協会より授与された。至高の名誉は「中日囲碁擂台賽」(日本側の名称=「日中スーパー囲碁」)で立てた殊勲に由り、第1~3回(1984.10.16~85.11.20, 86.3.1~87.4.30, 87.5.2~88.3.14)で主将として9連勝し、精鋭陣が激突する団体勝抜戦を劈頭3回制し**400年来の囲碁王国との逆転の端緒**を作った。彼は同じ西洋骨牌の橋牌の名手である鄧小平の宅で可く胡耀邦と組んで楽しんだが、胡の70歳の誕生日に藤沢秀行名誉棋聖(本名保, 1925~2009, 63年九段)を下した第1回の主将決戦は、中国初の盤上遊戯対局テレビ生中継に由って対局地の北京と全国で熱烈な喝采を博した。両国交流戦発足の1960年に惨敗を喫した中国碁界は半世紀の臥薪嘗胆を経て、世界戦優勝総数基準で2009年に日本を追い抜き今や日本を完全に圧倒しているが、**国民的な英雄が創出した[擂台賽効果]の30年持続の「紅利」(特別配当)**の源泉は、85年8月27日に同年齢の強敵小林光一(78年九段)を破った天

王山の戦いである。各 8 人出場の第 1 回で中国の 2 番手江鑄久七段（1962～ ， 87 年九段）が日本の 1～5 番手に連勝し、次に日本王者（同年賞金^{ランキング}序列 1 位）の小林が江以下の 6 人を立て続けに抜き、聶は対局前に静岡県熱海の景勝地の絶壁を眺めて自分は正に断崖の上に居ると感嘆した。彼はその日「得勝服」（勝負服）の心算で「中国」と書いた赤い半袖の^{スポーツ・シャツ}運動襦衣を着たが、卓球^{ナショナル・チーム}国家隊の女子選手から借りた縁起物で闘志・自信を喚起する挙動は常識破りである。異性に頼んだのは女子の方が 10 年来の世界制覇が個人・団体とも絶対的だからであろうが、日本に連敗した女子を 1965 年世界選手権の団体^{ダブルス}・複試合^{ミックス・ダブルス}・男女混合複試合 3 冠獲得を導いた容国団監督（1937～68）は、中国の競技^{スポーツ}運動全項目の世界王者^{チャンピオン}第 1 号の栄冠を摘み取る際に自己激励の豪語を發し、以来無数の選手の座右の銘と為り聶衛平や一般人乃至習近平にも大きな影響を与えて来た。習は 2016 年リオデジャネイロ五輪（8.5～21）中国代表団の総括大会（25）で、選手たちの「奮力拼搏」（全力で奮闘する）の意志と成績を褒め称え、「人生能有幾回搏」（人生に大勝負の死闘が何回有ろう）という容の名言を引いて、この様な精神は正に「中国夢」（中国の夢）の実現に必要であると語った。

習近平が党首就任後に唱えた「中国夢」は『現代漢語詞典』現行版の新設項の通り、「**指** 實現中華民族偉大復興的夢想，基本內涵是國家富強、民族振興、人民幸福。」（**指** 中華民族の偉大な復興を實現する夢を指す。基本的な内容は國家の富強・民族の振興・人民の幸福である）と為る。「夢」は当該項目の**③** **指** 「**比** 喻幻想或願望」（幻想或いは願望を喩える）に当り、用例の「～想 | 他從小就有一個當文學家的～」（「夢」「彼は小さい時から文學者に成りたい夢を持っている」）の前者は、「**①** **動** 幻想；妄想：這件事根本不可能，你別～了。**②** **動** 渴望：他小時候～着當一名飛行員。**③** **指** 夢想的事情：實現了自己的～。」（**①** **動** 幻想する。妄想する。「この事は到底出来ないから、夢見るな」**②** **動** 渴望する。「彼は小さい頃に飛行士に成ることを夢見ていた」**③** **指** 夢見る事。「自分の夢を實現した」）という多義を持つ。**①** の近義語「幻想」の「**①** **動** 以社会或個人的理想或願望為依拠，對還沒有實現的事物有所想像：～成為月球上的公民。**②** **指** 幻想出的情景：一個美麗的～。」（**①** **動** 社会或いは個人の理想或いは願望を依拠に、**まだ**實現していない物事を少し想像する。「月の住民に成ろうと幻想する」。**②** **指** 幻想した情景。「ある美しい幻想」）は**肯定的な形象が強く**、「妄想」の「**①** **動** 狂妄地打算：敵人～卷土重來。**②** **指** 不能實現的打算：痴心～ | 你想瞞過大伙兒的眼睛，那是～。」（**①** **動** ^{みだ}妄りに企む。「敵は^{けん ど ちようらい}捲土重來を妄想している」**②** **指** ^{もくろみ}實現不可能な目論見。「實現不能な夢を見る」「貴方は皆の眼を^ま認識化そうとしているが、それは妄想だ」）は**否定的な意味のみ**である。**【中国夢】**の語釈中の「夢想」は『広辞苑』で、「**①** 夢に見ること。「入賞するとは一だにしなかった」**②** 夢の中に神仏の示現のあること。**③** あてもないことを心に思うこと。空想」と為る。『日本国語大辞典』の**【夢想・夢相】**に拠ると、**①** は「南史－陳武帝紀“長驅嶺嶠，夢想京畿”」に由来し、**②** と同じ和製語義の**③** の用例 2 点の初出は「文明論之概略（1875）〈福沢諭吉〉四・七 “数千万年の後を推して文明

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方 (1) (夏)

の極度を夢想すれば」であるが、中国の最大規模を誇る国語辞書『漢語大詞典』（漢語大詞典編輯委員会・編纂処編纂，羅竹風主編，本文12巻＋索引1冊，[上海]漢語大詞典出版社，1986～94）では、「夢中懷想」（夢の中で思う）の意の①に「漢司馬相如《長門賦》：“忽寢寐夢想兮，魄若君之在旁。”」等4点の古代の用例，「②空想；妄想」に「宋蘇軾《贈清涼寺和長老》詩：“老去山林徒夢想，雨餘鐘鼓更清新。”」等4点の古今の用例が有る（下線は人名・地名・時代・年号等を表す同辞書の記号）。中国王朝正史大系「二十四史」の14番目に当り，南朝の宋・南齊・梁・陳4代170年間（420～589）の事績を記した『南史』（唐[618～907]の歴史家李延寿[生歿年不詳]撰，高宗[李治，628～83，49～83在位]の時に成立，本紀10巻・列伝70巻）より，前漢（西漢，前202～後8）の辞賦家司馬相如（前179頃～前118）の名作（後人仮託の説も有る）は数世紀も早い。北宋（960～1126）の文学者・書画家蘇軾^{しよく}（1036～1101）も，生歿が明治の思想家・教育家福沢諭吉（1834～1901）の800年ほど前に為る。俱に歴史が古い両義は①の12世紀後に空想・妄想の意が現れたのも興味深いが，負の要素も混じったこの単語が21世紀初頭の中国の理想・願望とも関るので吟味に値する。

「夢想」豪語の根底の「輝煌」願望と「華夏」心性

『日本国語大辞典』の【幻想】の説明は「〔名〕実際にはありそうもないことを，あれこれと想像すること。とりとめもないことを頭に思い浮かべること。妄想。空想」で，和製抜いの用例5点中「附音挿図英和字彙（1873）〈柴田昌吉・子安峻〉“castle-building 幻想（ゲンザウ）」が初出とされるが，『漢語大詞典』の項（語釈＝「不切實際的，不能實現的一種想像。」[現實に合わず，實現不可能な想像]）の用例3点は，2世紀前の「清李漁《玉搔頭・抗節》」に始まる（李[1611～80]は戯曲作者・小説家）。【妄想】の「〔名〕（古くは“もうぞう”）㊦（一する）（仏語）とらわれの心によって，真実でないものを真実であると，誤って認識すること。また，そのような迷った考え。邪念。㊧（一する）ありえないことを，みだりに想像すること。みだらな考えにふけること。また，そのような想像。空想。夢想。ほうそう」は，其々「菅家後集（903頃）秋晚題白菊」等4点の用例と仏典「円覚経」の出处，「日葡辞書（1603-04）」等5点の用例が有るが，『漢語大詞典』では仏教語の①に仏典『楞嚴経』と「唐権徳輿《送文暢上人東遊》詩」の用例，②「胡思乱想」（根拠の無い妄想[ををする]）に「唐白居易《飲後夜醒》詩」等3点の用例，③「不切實際的或非分的想法」（現實に合わない，或いは分不相応な考え）に「宋陸游《山園草木四絶句》之一」等3点の用例が有る。中唐（766～827）の文人権徳輿（759～818）・詩人白居易（772～846）の用例は，日本語の㊦㊧より其々1世紀・8世紀ほど古いが，同じ時代に妄想の語義が生れ，南宋（1127～1276）前期の詩人陸游（1125～1209）に由って空想の意を派生させた事が目を引く。日本語は中国語から多くの言葉を吸収し取捨・派生・独創

も随分して来たが、温良の国民性に相応しく負の語義は余り自発的に生み出さず寧ろ忌避する傾向に在る。『現代漢語詞典』の【妄想】の用例「痴心～」は単独で立項され、「一心想着不可能實現的事」（専ら實現不可能な事を考える）と説明されている。【痴心】は「① ㊦沈迷於某人或某種事物的心思：一片～。② ㊦形容沈迷於某人或某種事情：～情郎」（① ㊦ある人或いはある物事に耽溺する思い。「一途に思い焦がれる思い」② ㊦ある人或いはある物事に耽溺することを形容する。「一途な恋人 [男性]」)の両義であるが、『日本国語大辞典』の【痴心・癡心】では「【名】おろかな心」と解され、「今昔一一・五」「文明論の概略（1875）〈福沢諭吉〉四・七」の用例と、「西廂記－張君瑞害相思病雜劇“自レ古人云、癡心女子負心漢、今日返レ其事レ也”」が示してある（『漢語大詞典』の用例4点中の「〔法苑珠林〕卷十四」「唐寒山《詩》之二四八」は、和文初出の『今昔物語集』[編者不詳、12世紀前半の成立か]より早い）が、【夢想・夢相】③の初出と同じ文献に見えるこの単語は『広辞苑』から消えている。

『現代漢語詞典』の【痴（癡）】（括弧内の*付きの見出し語は異体字）は、①「㊦愚：愚笨：～呆|～人説夢|人家笑我太～。」（㊦愚か。不器用。「痴呆」「痴人夢を説く」「人は私が莫迦過ぎると笑う）、②「極度迷戀某人或某種事物：～情。」（ある人或いはある物事に極度に夢中になる。「一途な愛情」）、③「極度迷戀某人或某種事物而不能自拔的人」（ある人或いはある物事に極度に恋着し抜け出せない人：書～（書呆子）。「書痴 [本ばかり読んで現実と結び付ける事が分らない人]」）、④「〔方〕㊦由於某種事物影響變傻了了的；精神失常：吓～了。」（〔方 [言]〕㊦ある物事に由って愚かに為った。精神に異常を来した。「吃驚して呆然とした」）から為る。興味深い事に多くの親字項の最後の「㊦姓」（㊦姓の1つ）の意が無く、①④の「㊦呆」の意に対する拒否反応の強さが窺える。同辞書所収の1万3千字余りの単漢字は漢族の約4700の姓を完全に含め得るが、使用人口が最も少なく良からぬ意味の「難」¹¹⁾の様に姓としての用法は一々記載されない。日本では2004年6月11日に法制審議会（法相の諮問機関）人名用漢字部会が見直し案を公表し、追加予定の578字内の「糞・呪・屍・癌・姦・淫・怨・痔・妾」等が世間の反対に遭った。結局この9字に続いて「蔑・膿・腫・娼・尻・嘘・罵・誹・嫉」等79字が削除された¹²⁾が、質・量とも度を超す負^{ネガティブ}字彙（造語）が選ばれた事は中国の「名の文化」では理解できない。日本人が様々な形で見せる道徳・美意識の潔癖は中国では子供の命名に端的に現れ、選択の余地が無い姓に関しても同辞書の記載の有無に倫理・美感の判断基準が読み取れる。【偽】に無く反対語の【真】や同音(wei)の【為】に有り、干支の【丑】に有り「美」（姓の1つ）の反対語【丑（*醜）】に無い、という風に悪意・邪気・背徳を駆逐する不文律の存在が感じられる。1993年8月11日に東京都昭島市の役所に「悪魔」と命名した男児の出生届けが出され、2字とも常用漢字の範囲内につき受付された後に法務省民事局の判断で不受理と為ったが、「悪」が「善」と逆に姓と為らない中国では左様な親権濫用は先ず起り得ない。「痴・癡」は『日本国語大辞典』の前の項の「智」と対義の関係に在るが、中国で

は「是/非」「明/暗」「強/弱」「勝/敗」「盛/衰」「興/亡」等の対(何れも前者が姓)と同様に、「智」は使用人口が少ない「小姓」に入り「痴」は少なくとも辞書で姓として扱われない。『日本漢語大辞典』の「〔名〕①物事を考え判断する力がたりないこと。おろかなこと。また、その人。あほう。ばか。しれも。痴愚。②(梵 moha または mūḍha の訳語) 仏語。三毒または根本煩惱の一つ。物事に対して正しい判断が下せない暗愚な心のはたらきをいう。惑い迷う心作用のこと。愚痴蒙昧(ぐちもうまい)は、『広辞苑』の【痴】の「〔仏〕(梵語 moha 慕何) 根本の真理を知らないこと。基本的な煩惱の一つ。愚痴。無明」より1つ多いが、俱に否定的な意味に対して『現代漢語詞典』の多義は②③に肯定的な使い方も有る。

「愚痴蒙昧」の短縮形の様な近義語「愚昧」は『広辞苑』で、「〔昧〕は暗い意) 愚かで道理が分からないこと。“一な人”と説明・例示されている。『現代漢語詞典』の「〔圖〕缺乏知識；愚蠢而不明事理」(〔圖〕知識が欠如する。愚かで事理に暗い)は、用例の四字熟語「～無知」の様に知識の不足や知力の貧弱を病巢とする。「痴」は病垂やまいだれ(中国語＝「病〔字〕旁」「病字頭」)＋「知」の字形に知に関する病的な性質を示すが、【痴(*癡)】の16の子見出し中拼音ピンイン(中国語の発音の羅馬字表記、又その発音)順で1番目と為る「【痴愛】chī'ài」は、「〔圖〕極度愛恋；執着地愛」(〔圖〕極度に熱愛する。夢中になって愛する)という中性的な意味である。『日本国語大辞典』の【痴愛・癡愛】の「〔名〕 仏語。盲目的な貪欲。的確な判断を失わせる執着心」は、仏典「経律異相-七」に由来し「妙一本仮名書き法華経(鎌倉中)一・方便品第二」等3点の用例が有る。『漢語大詞典』の【癡愛】の語釈「亦作“痴愛”。入迷的愛」(亦「痴愛」に作る。夢中になる愛)に付く「隋江総《撰山栖霞寺碑》」の用例は、南朝陳(557～89)の大臣・詩人(519～94)の作で、鎌倉時代(1185～1333)中期(1221～46)の和文初出より7世紀ほど早い。日本語には中国語からの輸入は無く仏語由来の単語は『広辞苑』に入っていないが、中・日の3辞書の語釈中の「極度」「執着」「盲目的」「入迷」(夢中になる)は、「痴愛」の熱狂的・盲目的の性質を表し狭隘な「狂愛」の危険性を示唆する。小説家・劇作家谷崎潤一郎(1888～1965)は中篇「春琴抄」(創元社、33)で、自ら針で両眼を潰してまで盲目の女性主人公(三味線奏者)に献身的に奉仕する男性主人公(丁稚ていぢ)の言わば「盲愛」を描いたが、「痴愛」を含む長篇『痴人の愛』(改造社、25)の題名は「痴人説夢」を連想させる。『現代漢語詞典』の【痴(*癡)】①の用例に有るこの四字熟語は、子見出し項で「比喻説根本辦不到的荒唐話」(到底行れない荒唐無稽の話をする事に喩えて言う)と説明されている。『広辞苑』の【痴人】(語釈＝「ばかな人。おろか者。たわけもの」)の熟語項にも、【痴人夢を説く】(＝「〔愚かな人が自分の見た夢の話をするように〕話のつじつまが合わないことのたとえ」)が有り、関連の【痴人に対して夢を説く】は「〔冷斎夜話九〕(愚かな人に夢の話をする、勝手な解釈をしたり、本気にして騒いだりすることから)言うことが相手に通じないことのたとえ。また、ばかばかしいことのたとえ」と為る。

『日本国語大辞典』の【痴人・癡人】（語釈＝「〔名〕おろかな人。ばかもの。たわけもの。うつけもの。愚人。ちんにん」）は、「白居易－対酒詩“隨_レ富隨_レ貧且歡樂，不_レ開_レ口笑_レ是癡人”」を漢籍典拠とし、用例4点の初出「読本・忠臣水滸伝（1799－1801）前・四回“常言（ことわざ）に痴人（チジン）は婦を畏賢女は夫を敬といふことあり此類なるべし”」も中国文学所縁であるが、『漢語大詞典』の【癡人】（「亦作“痴人”」）の①「愚笨或平庸之人」（愚かな、或いは凡庸な人）の用例4点の初出は、「北齊顏之推《顏氏家訓・帰心》：“世有癡人，不識仁義，不知富貴，并由天命。”」（顏 [531～90 頃以降] は白の2世紀余り前の北齊 [550～77] の文学者）である。【ちじんの前（まえ）に夢（ゆめ）を説（と）く】では用例3点の後に、漢籍典拠「朱熹－答李伯諫書“来書云，子貢之明達，性与_二天道_一，猶不_レ与_レ聞_レ，熹竊謂，此正癡人之前説_レ夢之過也”」が有る。【ちじん 夢（ゆめ）を説（と）く】では用例の「作詩志毅（1783）“世儒知らず，牽合胡説して解を費す。癡人の夢を説く如し”」しか無いが、『漢語大詞典』の【癡人説夢】（「亦作“痴人説夢”」）の解説では、「語本《五灯会元・龍門遠禪師法嗣・鳥巨道行禪師》：“祖師西来，直指人心，見性成佛。癡人面前，不得不夢。”」（「語本～」＝語の由来は～）とし、「後以“癡人説夢”指凭妄想説不可靠或根本辦不到的話」（後に「癡人夢を説く」を以て，妄想到_レ凭_レて信用できない話，或いは到底行_レれない話をする事を指す）の典拠に、「宋無名氏《愛日齋叢鈔》卷三」等4点が示されている。「亦省作“癡夢。”」（亦省略して「癡夢」に作る）の説明に出た単語は、『現代漢語詞典』では「囫迷夢」（当該項目は「囫沈迷不悟的夢想：他終於從～中覺醒過來。」[囫耽溺して悟らぬ夢想。「彼は到頭迷夢から目醒めた」]）と為る。『広辞苑』の【迷夢】は「夢のようなおろかしい考え。心のまよい。“一をさます”」で、『日本国語大辞典』の「〔名〕 仏語。迷いの境地を夢にたとえた語。夢の中を行くような迷いの境地」の用例（3点中の初出＝「性靈集－八（1079）為亡弟子智泉達嘸文」）の通り和製漢語である。『漢語大詞典』では出処はやはり中国。『日本国語大辞典』の『広辞苑』に無い【痴夢・癡夢】は「〔名〕 おろかな夢。ばかげた夢」の意で、「あめりか物語（1908）〈永井荷風〉夏の海」等2点の用例が付くが、『漢語大詞典』の【癡夢】（「亦作“痴夢”」）の①「猶迷夢」（迷夢に同じ）には、「宋陸游《五鼓起坐待旦》詩」等2点の典籍が有る。③「見“癡人説夢”」（「癡人説夢」を見よ）と関連する②「指不切合實際的想法」（現実に合致しない考え方を指す）は、用例の「瞿秋白《餓郷紀程》二」は中共第2代党首（1927.8.7～28.7.20）を務めた革命家・文学者（原名霜，1899～1935）の作品である。初代党首の陳独秀は元北京大学（1898年創立）文科学長（責任者）・文学教授（1917～19）で、瞿も中共の理論・言説重視の伝統を現す様に評論・隨筆・翻譯を数多く発表した。『餓郷紀程』（露西亞への道程の記）は『晨報』記者時代の訪ソ（1920冬～21初）前・中の手記で、「餓郷」は単行本『新俄国游記』（新露西亞紀行。[上海] 商務印書館，22）の「俄国」を指す。「餓えの郷」は「餓・俄」の同音（異声調のè・é）に引っ掛けて、革命後のソ連の窮乏に対する中国の一部の知識人等の皮肉を逆手に取った諧謔である。「緒言」でソ

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方 (1) (夏)

連の有り形を「紅艷艷光明鮮麗」(艶やかで赤い、明るい、鮮やかで麗しい)と讃え、今回の旅で皆の為に「辟一条光明的路来」(希望へ続く路を拓いて来る)と述べたが、中国の雰囲気
の暗黒・陰湿に関する形容は40年後の党首失政に由る飢餓地獄に用い得、「黒甜郷」(黒い甜郷)の豊かさの裏の汚穢は更に半世紀後の新興老大国(造語)に適する。

新世紀の2人目の新党首と為った習近平の「中国夢」「中華民族偉大復興的夢想」の提唱は、理想の気品や魅力を持つ反面「夢(想)」の非現実・空想的の形象も付き纏う。瞿秋白が現代的な語義を与えた「痴夢」から連想する「白日夢」は『日本国語大辞典』で、「【名】(“はくちゅうむ”[白昼夢]に同じ)」と説明され、「自然と人生(1900)〈徳富蘆花〉自然に対する五分時・山百合」等3点の用例が有る。主項目の【白昼夢】は語釈の「【名】目が覚めているときに、ひとりでに空想や想像が視覚性などを帯びて現われ、それにふけて放心状態となること。また、その非現実的な映像。転じて、非現実な空想をたくましくすること。白日夢」と、用例の「陰獣(1928)〈江戸川乱歩〉」等2点とから為る。【白昼】の「【名】まひる。ひるなか。日中。白日」に付く用例4点の初出は、「田氏家集(892頃)上・九日上山行」中の優雅な抒情の「青山踏_レ嶮偏随_レ俗、白昼登_レ高欲_レ趁_レ仙」で、典拠の「漢書-賈誼伝“白昼大都之中、剽_レ吏而奪_レ之金-”」の物騒な事件との対照が興味深い。国語辞書は使用の規範を示す言語の鑑と共に世相を映す社会の鏡でもあり、展示される語句や解釈・挙例から歴史の年輪や人間の情理・集団の心性も読み取れる。『現代漢語詞典』の【白昼】の「囿白天：灯火通明、照得如同～一樣。」(囿真昼。「灯りが明々と照らし、白昼の様だ」)から、谷崎潤一郎の伝統回帰を唱える文明批評・文学論に出た電灯照明の例へ連想が飛ぶ。彼は随筆「陰翳礼賛」(『経済往来』[日本評論社]1933年12月号～34年1月号、創元社39年刊)の中で、西洋の文化は陰翳を消す事に執着し可能な限り部屋の隅々まで明るくするが、古_{いにしえ}の日本では寧ろ陰翳を利用してその中でこそ映える芸術を作り上げたとし、「脱亜入欧」の近代化に伴う生活形態の変化や東洋の美意識の喪失に苦言を呈した。「脱亜入欧」の初出は1887年4月14日の『山陽新報』社説「欧化主義ヲ貫カサル可ラス」と為る¹³⁾が、100年後の胡耀邦失脚の要因には欧化を謳歌する急進維新(造語)志向への容認が有った。「資産階級自由化」反対の政治運動_{キャンペーン}は結局人々の生活向上の欲求に克てず、改革・開放の成果として先進国並みの豊かさを目指す国・民の理想は実現に向って来た。朝鮮半島の夜の衛星写真に映る北側は電力不足で暗く南側と鮮烈な対照を為すが、毛沢東時代の中国も経済の競争で1965年頃に韓国に逆転された北朝鮮と同じ水準であった。『現代漢語詞典』の編纂開始・初稿完成・見本制作の1958・59・60年の大陸では、電力窮乏の所為で一般的に暗く国民党軍の空襲に備える灯火管制まで有ったが、第3版(96.7)から白昼同等(和製熟語「白昼堂々」に擬えた造語)の灯火煌々を表す用例が添えられた事は、文明・光明の「明」を絵に描いた様な情景で経済の長足の進歩を実感させる。

灯火の「火」や胡耀邦の「耀」の部首「光」を字形に含む熟語の「燦爛輝煌」は、白昼効果

をもたらす光線・照明等の他に偉業や栄光の歴史等の形容に能く用いられる。【燦爛】の「**囿**光彩鮮明耀眼」(囿輝きが鮮明で眩しい)の用例として、「星光～」(星の光がきらきらと輝く)の次に「～輝煌」(燦爛として輝き煌めく)が出ており、最後の「～的笑容」は同義の「眩しい笑顔」や dazzling smile (目も眩むほどの笑み)と比べて、字面の「火」が象徴する様に「火熱」(火の様に熱い。熱烈。激烈。盛大。)の形象が強い。同じ形容詞の【輝煌】は「光輝燦爛」(燦然として光り輝く様)と「(成績等)顯著；卓著」(〔成績等〕顯著な様。卓越した様)の両義で、①②の用例は其々「灯火～|金碧～」(「灯りが煌々と輝いている」「金色や赤碧の彩りが煌びやかである。建物が極彩色に輝く」)、「戦果～|～的成績」(「戦果が輝かしい」「輝かしい成果」と為る。『広辞苑』にも【燦爛】が有る(=「きらめき輝くさま。「一たる宝玉」「金色^{きんしき}」)が、『日本国語大辞典』で立項された「き-こう【輝煌・輝煌】」(語釈=「〔名〕かがやききらめくこと」, 用例=「随筆・絵事鄙言」等2点, 漢籍典拠=「張衡-西京賦」)は無い。日本的な渋い「陰翳」好みは「輝煌系」(造語)の漢単語への敬遠にも見られるが、五輪・世界選手権の高飛込^{たかとびこみ}メダル金牌^{メダル}を4個・10個を獲った「跳水女皇」郭晶晶^{とびこみのじょおう}(1981～)と、五輪4個獲得者の「跳水王子」田亮(1979～)の名前が合成した「亮晶晶」(きらきらしている)は、暗黒・混沌に強い嫌悪・恐怖を抱く中国人の陰影駆逐の本能から好まれている。習近平が1992年生れの愛嬢に名付けた「明沢」の「沢」は、夫人彭麗媛(1962～)の故郷の山東省荷沢市か毛沢東(又は両方)から取ったと思われるが、「明」には毛を太陽に喩える個人崇拜が示した中国人の「光明礼賛」の習性が見て取れる。「輝」の「光・軍」は軍所属歌手出身の彭(現・解放軍総政治部歌舞団団長, 少将)の異彩、「煌」の「火・皇」は「習皇」(皇帝並みの権勢を表す在野言説の命名)の激烈さに妙に合うが、中国の古称「華夏」の2字は「文華・華美」「盛大」の意に輝煌への憧憬の要素が仕込んである。中国の政治家は文学者も顔負けする様な美辞麗句・大言壮語を発する事が多々有るが、煌めき輝く「政績」(執政業績)を追う願望に駆られる場合は江沢民時代以来増え続けて来た。

アメリカン・ドリーム ^{かがくてきはってんかん} を追い 「科学発展観」 ^{ちゅうごくのゆめ} を超える 「中国夢」

『現代漢語詞典』の【白昼】の唯一の熟語項の【白昼見鬼】(白昼^{ちゆうりつ}見鬼を見る)は、参照を指示する主項目の【白日見鬼】の通り、「比喩出現不可能出現的或荒誕離奇的事情。也說白昼見鬼。」(有り得ない事或いは荒唐無稽な事の出現を喩える。白昼見鬼とも言う)である。後の【白日做梦】は「比喩幻想根本不能實現」(幻想が到底實現ではないことの喩え)で、前の【白日】の「**囿**①指太陽：～依山尽，黄河入海流。②白天：～做梦。」(囿①太陽を指す。「白日山に依って尽き，黄河海に入って流る」②白昼。「白日夢を見る」)は、盛唐の詩人王之涣(688～742)の七絶「登鸛鵲楼」(鸛鵲楼に登る)の名句と白日夢の組み合わせが面白い。下の「欲窮

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方 (1) (夏)

千里目、更上一層楼。」(千里の目を窮めんと欲し、更に一層の楼に上る)の豪語も、地球規模の高い視点から一層立派な青写真を掲げる習近平の豪邁な雄姿に似合うが、理想・幻想の二面性や幻滅の危険性、白日夢と隣り合せる語弊を顧みぬ鼓吹は必要性が有る。「中国夢」の由来である「美国夢」は『広辞苑』の「アメリカン・ドリーム【American Dream】で、「誰にも平等な機会が保証されているアメリカ社会では、人は才能と努力次第で成功し、社会的・経済的に限りなく上昇できるとする考え方」と解釈してある。『日本国語大辞典』の「**囿**(英 American dream) アメリカの夢。米国建国の理想で、自由・平等・民主主義に立脚するもの」は、使用履歴を示す文例が無いが理念の鍵詞を出している。「米国の夢」の起源は英国の植民地統治から脱出した時の「米国独立宣言」(1776.7.4, 大陸会議採択)の、自由・平等・幸福の追求を天賦の人権とした主張に遡れる。起草者のジェファソン(1743~1826)は初代国務長官(90.3.22~93.12.31)・第3代大統領(01.3.4より8年)等を歴任し、19年に「建学の父」として名門のバージニア大学を創立し、奇しくも「独立宣言」可決50周年の日に他界した。150年後に略同じ享年で逝った毛沢東の治下では「個人奮闘」は非無産階級思想とされ、「建国の父」の色彩を帯びた「新時代の核心」の「中国夢」も米国の成功物語の原動力と違って、国家・民族・人民の優先順位と為り自由を追求する人権意識が依然として弱い。『現代漢語詞典』では中共首唱の【新民主主義革命】が有るのに「民主主義」の立項は無く、「**美国夢**」と似て非なる「中国夢」は民主主義を抜きにした点も特色かも知れない。

【新民主主義革命】の「在帝国主義和無産階級革命時代、殖民地半殖民地国家無産階級領導的資産階級民主革命。我国從1919年五四運動到1949年的革命、屬於新民主主義革命。它是共产党領導的、以工農聯盟為基礎的、人民大衆的、反帝、反封建、反官僚資本主義的革命。」(帝国主義と無産階級革命の時代に、殖民地・半殖民地国家の無産階級が指導する資産階級民主革命。我が国の1919年「5.4」運動~1949年の革命は、新民主主義革命に属する。それは共产党が指導し、労働連盟が基礎を為し、人民大衆の、帝国主義・封建・官僚資本主義に反対する革命である)は、成立の2年前の「5.4運動」までを指導したと言う処が中共史観らしい我田引水である。『広辞苑』には『日本国語大辞典』と同じく【新民主主義】が有り、その「一九四〇年毛沢東が提唱し、中国共産党の指導原理となった革命理論。半封建・半植民地的な中国では、旧来のブルジョア民主主義革命と異なる新しい型の民主主義革命、すなわち労働者階級に指導される農民など諸階級の連合によって革命を行うべきとするもの」は、理論・実践の両輪で進む中共の指導原理を打ち出す力が党首の資格に有る事を示唆する。【民主主義】の語釈は「(democracy)語源はギリシア語の demokratia で、demos (人民)と kratia (権力)とを結合したもの。権力は人民に由来し、権力を人民が行使するという考えとその政治形態。古代ギリシアの都市国家に行われたものを初めとし、近世に至って市民革命を起こした欧米諸国に勃興。基本的人権・自由権・平等権あるいは多数決原理・法治主義などがその主たる属性であり、

また、その実現が要請される」で、「山路愛山、社会主義管見“第一の要件は一を土台にした政府を作ることである”」が出典に挙げられる（『日本国語大辞典』の用例2点の初出は5年早い「文明批評家としての文学者 [1901] 〈高山樗牛〉“ニーチェは更に論歩を進めて民主々義と社会主義とを一撃の下に破碎し”」）が、民主・科学を社会の進歩の梃子とした「5.4運動」の1世紀後の中国の忌避を浮彫にする。『論語』「泰伯」に「民可使由之，不可使知之。」（民は之に由らしむ可し。之を知らしむ可からず）と有り，人民に従わせる事は出来るがその理由を知らせる事は出来ないという孔子の主張は，愚民政策（『広辞苑』『現代漢語詞典』『日本国語大辞典』とも収録した和製漢語）の発想が感じられるが，『広辞苑』が「新民主主義」を詳述するのと同様に「民主主義」を紹介する事が出来ないのは，民に行らせない可く之を知らせない情報封鎖だとするなら悲しむ可きである。

中国は「6.4」後の孤立から脱出する為「国際接轨」（国際社会の軌道との連結。国際基準への順応）を進めたが、「新民主主義」を採録し「民主主義」を除外する不整合は世界の「在来線」を拒絶する感じである。それでも理念の違いで導入しない「^{アメリカン・ドリーム}美国夢」に倣って「中国夢」を考案したのは，西側からの「精神汚染」を警戒しつつ強者崇拜・争覇意識を深める流れの所産と言えよう。中国の大衆が初めて「^{アメリカン・ドリーム}美国夢」に接した契機は「文革」後文学の復興黄金期（1984~86）に，米国の作家ターケル（1912~2008）著口述実録文学 *American Dreams: Lost & Found*（米国の夢——喪失と発見。1980）の中国語版（^{ひつさく}畢朔望・董楽山訳『美国夢尋』^{アメリカン・ドリーム}『米国の夢を尋ねて』，中国对外翻訳出版公司，84）が刊行された事である。日本語版（中山容 [他訳]『^{アメリカン・ドリーム}アメリカン・ドリーム』，白水社）より6年早く出た先行は，未知の世界に遭遇した興奮と宿敵及び目標である米国への重視を思わせるが，30年後に習近平は「中国夢」で米国への対抗意識を露し^{あらわ}米国との比肩を夢見始めた。19期1中全会の翌日の『人民日報』第1版に^{ほとんど}殆ど全紙面を使って，習近平の総書記・军委主席当選と新指導部誕生が報じられ，習の写真が下の7常委の集合写真の約1.26倍の大きさで真ん中に載ったが，左上の紙名題字の右の準最重要（造語）記事「習近平応約与美国総統特朗普通電話」（習近平 要請に応じてトランプ米大統領と通話）は，「19大」閉幕・総書記再任に対して相手が祝意を表して来た事を誇らしく顕示している。同紙の1984年10月1日の同じ位置の記事「首都各界青年盛会歓迎三千日本青年」は，紙名題字の下の^{トップ}首要記事「趙紫陽総理挙行盛大招待会 / 熱烈慶祝新中国成立三十五周年」より一段高く，第1版の下半分の左側の建国35周年招待会に於ける趙総理の講話と並ぶ右側の2点は，中国が招待した超大型の日本青年代表団を歓迎する大会に於ける胡耀邦総書記の講話と，友好交歓大会に寄せた中曽根康弘総理大臣の祝辞である。中曽根著『自省録——歴史法廷の被告として』（新潮社，2004）の第3章「人物月旦（続） 海外の偉大な指導者たち」第11節「胡耀邦——あたかも『三国志演義』の登場人物」に拠ると，総書記として何が一番厄介な問題ですかという彼の質問に対して，胡は「朝五時半に届けられる『人民日報』のゲラ

に全部、目を通して、必要な箇所を直す。これが、一番きつい」と答えた。党中央機関紙の記事が毎日逐一党首の決裁を受ける仕組みは驚く可きであるが、後に重要な言説に限る様になったとしても昨今の党首突出の内情を窺わせる。中日青年交流を目玉とする節目の国慶節のこの紙面も胡の首肯が有ったに違い無いが、国慶閱兵に由って翌日の第1版の主役と為った鄧小平も訪日(1978.10.22~29)の体験で、初めて近代化を体感でき日本に習って高度の発展・繁盛へ邁進しよう決意を固めた。首脳相互信頼で形成した両国史上最高の親善期は胡の失脚で忽ち終止符を打たれ、以後は中国の強硬姿勢の擡頭と日本の経済低迷の恒常化に由って悪化の一途を辿って来た。『美国夢尋』の訳題は張岱(一名維城, 1597~1689 [一説に84])の随筆『西湖夢尋』(5巻, 71)に由来し、3世紀前に逝った明(1368~1644)末・清初の文学者のこの名作は、明朝滅亡後の哀愁を込めて西湖(杭州 [今の浙江省省都])の名所への懐旧を表す物である。風光明媚の西湖は毛沢東が畔に2カ所の別荘を持つほど愛した景勝地であるが、中国は中・日の排他的経済水域内の中間線附近で1999年から開発した東海(東支那海)瓦斯田を、西湖所縁の「平湖」「冷泉」「春暁」「断桥」「残節」「龍井」「天外天」と名付けた。開発機構と天然気の供給先が浙江に在る故の命名は東海を内海と見る語感が有り、日本側の資源を吸い上げる「我田引気」(和製熟語「我田引水」に擬えた造語)の「吸壺」(「西湖」と同音のxīhú)の意図が無くても、毛の亡霊が絡んだ強引な踏み込みと両国の力関係の逆転には瞠目させられる。

1980年代中期の中国文学の百花斉放を最も艶やかに彩った「尋根(根探し)派」の名は、アフリカ系米人作家ヘイリー(1921~92)の歴史小説*The Roots: Sage of an American Family*(根——米国の一家族の長篇冒険譚。76)に触発された物である。この流派は哥倫比亞の小説家ガルシア＝マルケス(1928~2014)の長篇『百年の孤独』(67)等、ラテン・アメリカ文学の「魔術的現実主義」(中国語＝「魔幻現実主義」)の影響を強く受け、中華文化の伝統や独自の表現方法の試掘・深耕に努め中国特色の有る新天地を切り開いた。彼の南米の巨匠のノーベル文学賞受賞(1982)も中国の文学者の競争心に火を付け、高行健(1940~ , 98年より仏蘭西籍)と莫言(原名管謨業, 1955~)の受賞(2000・12)に繋がった。西欧の前衛文芸への傾倒から実験的な手法を愛用した小説家・劇作家の高は「6.4」後に亡命し、土着的な小説家の莫は「文革」末年に軍人と為り改革・開放元年に共産党に加わり、同年から総参謀部で保密員(機密保持係)・政治教員・宣伝幹事を歴任し、解放軍芸術学院(1960年創立)文学系(学部)での勉強(84~86)を経て、97年まで総参謀部文化部創作室の作家を務め「党齡」(党員歴)・軍歴が俱に長いが、創作趣向や政治信条の違いに関らず日本初の同賞受賞(68)作から大きな示唆を得た。川端康成(1899~1972)の中篇小説『雪国』(35~47, 諸誌に分載, 48年創元社刊)の中の、「女の印象は不思議なくらい清潔であった。足指の裏の窪みまできれいであろうと思われた」は、同賞有力候補の小説家・劇作家三島由紀夫(本名平岡公威, 1925

～70)の精密描写と共に、高行健に日本文学の視点や手法の独自性と新鮮さを感じさせ賛嘆を博した。「湯槽から溢れる湯を俄づくりの溝で宿の壁沿いにめぐらせてあるが、玄関先では浅い泉水のように拡がっていた。黒く逞しい秋田犬がその踏石に乗って、長いこと湯を舐めていた」という件から、莫言は犬も湯も故郷（山東省高密県）の田舎も立派な題材に為れると悟り文学の開眼をした。「文革」終了時23歳だった習近平の本格的な思想形成は而立（30歳）の頃と思われ、改革・開放初期の世界第1・2位の経済大国の影響はその根の一部に有ろう。彼が総書記就任早々に掲げた「中国夢」と直前の「18大」政治報告の国民所得倍增計画（2010～20）には、鎖国状態の打破で人々が世界に目を向け有益な刺激を貪欲に受ける時代の名残が見て取れる。後者は前年比7.2%増が10年続けば倍と為る「72の法則」に基づく順当な目標であるが、日本の1961～70年国民所得倍增計画の二番煎じで高成長慣れの国民への訴求力が弱い。鄧小平時代から30年以上の発展時間差で近代化の師を為す日本への後追いをしていたが、2010年に日本が42年前に上ってから守り続けた世界第2位の経済大国の座に就いた後も、昭和末期の様な成熟した繁栄を目指す意欲から先輩国の半世紀前の起爆剤を使った。習は又2015年11月10日に自ら長を務める中央財經領導小組の第11回会議で、日本から仕入れた用語で「供給側結構性改革」（供給側の構造的改革）を提唱した。7ヵ月後の『現代漢語詞典』で新設された【供給側】はこれを用例とし、語釈は「図指国民経済中供給的一方」（図国民経済の中の供給する側を指す）と為るが、【側】の項にはこれに合せて中国語に無い「片方」の意を追加する補完は無い。漢籍の「供給」に現代的な意味を与えた日本でも最大の国語辞典には「供給側」は無いから、習の「立功・立言」の「創新」は雪達磨的に膨らんで行き少壮の焦燥の様相も漂う。

21世紀の最初の中共新党首胡錦濤が唱えた「科学発展観」は、初当選の2年半後の『現代漢語詞典』第5版（2005.6）で立項され、「關於我国现阶段發展的符合科学的總体看法和根本觀點，其基本內容為：堅持以人為本，通過統籌城鄉發展、區域發展、經濟社會發展、人与自然和諧諱發展、国内發展和對外開放等，實現全面、協調、可持續的發展。」（我が国の現段階の發展に関する科学的な全体的見方と根本的觀點。其の基本的な内容は、人を本と為すことを堅持し、都市と農村の發展・地域の發展・經濟社會の發展・人と自然の調和的發展・国内發展と對外開放等の全面的・統一的な計画・考慮を通じて、全面的・協調的・持続可能の發展を実現することである）と説明された。「18大」の党規約改正（2012.11.14採択）で党の指導思想に追加された事を受けて、第7版で「是以胡錦濤為代表的中國共產黨人在新世紀新階段對發展問題的新認識，是馬克思主義同当代中國實際和時代特徵相結合而形成的理論體系，是馬克思主義關於發展的世界觀和方法論的集中體現，是中國特色社會主義理論體系的重要組成部分，是中國共產黨的指導思想。」（胡錦濤が代表と為る中國共產黨人の新世紀の新段階に於ける發展の問題に対する新しい認識であり、マルクス主義と当代中国の実情・時代の特徴とが結合して形成した

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方 (1) (夏)

理論体系であり、発展に関するマルクス主義の世界観と方法論の集中的な体现であり、中国の特色有る社会主義の理論体系を構成する重要な部分であり、中国共産党の指導思想である」と書き換えられた。党規約に記された中核的な理念の「以人為本、全面協調可持続發展」まで消えたのは、【馬克思（マルクス）主義】【列寧（レーニン）主義】【毛沢東思想】【鄧小平理論】【“三個代表”重要思想】の字数を超えぬ制限の所為であろうが、中身を完全に抜かした上書きは現在・未来の評価・地位を重視する「立言」の追求を窺わせる。次の【科学共産主義】・後の【科学社会主義】と対義語の【空想社会主義】は、『広辞苑』の【科学的社会主义】【空想社会主义】の様に一般教養の常備項目でもある。独逸の思想家・革命家エンゲルス（1820～95）は『空想から科学への社会主義の発展』（80）で、共同創造者を為したマルクス主義の科学的な社会主義を歴史・理論の両面から概説した。中共史観で現代の起点とされる1919年「5.4運動」も「科学・民主」の旗を掲げたので、マルクス主義と中国の新民主主義革命の正統を踏んだ胡は共産主義青年団出身の優等生らしい。「科学發展観」に対する習近平の超越は空想への逆戻りにならぬ夢想が目玉と為り、文芸創作の流儀を表す中共の用語で言えば「革命的現實主義＋革命的浪漫主義」に当る。

政争の勝敗に由る浮沈・栄辱の激変

初代総書記を解任し武装闘争の路線を採択した「8.7会議」の90年後の2017年夏、習近平・王岐山（1948～，政治局常委〔6位〕・中央紀律検査委員会書記）^{コソノ}2人組は、秋の「19大」に於ける権勢・声望伸張の最大化の為「突然発力」（突如出撃）を見せ、「8.7」の23日前の「7.15」に孫政才（1963～）の重慶市委書記を解任し、同23日後の「8.30」に軍委聯合（統合）參謀部參謀長房峰輝（1951～，10年上将）・総政治部主任張陽（同）の身柄を拘束した。最年少の政治局委員で次期党首候補として常委会入りが有力視された孫は、巨額の収賄等に由り9月29日の政治局會議決定で党籍剥奪・公職追放の処分を受け、翌年5月8日に天津市第1中級人民法院（地方裁判所）で無期懲役の判決を言い渡された。党大会の直前に指導部成員を狙い撃ちし失墜させるのは建党後90年の間に無かった事で、四半世紀前の胡耀邦失脚も9ヵ月後の「13大」の準備工作ではあるまいが、習近平体制誕生の8ヵ月前の薄熙來（1949～）の重慶市委書記解任（2012.3.15中央決定）が第1例である。薄は政治局委員・中央委員の職務停止（4.10政治局會議決定）と党籍剥奪・公職解任（9.28同）を経て、翌年9月21日に濟南市（山東省省都）中級人民法院で収賄・横領・職権乱用の罪で無期懲役に処された。「文革」後の「刑不上常委」（刑罰は〔政治局〕常委に及ばぬ）という暗黙の了解の下で、1990年代以降の党首は権力闘争で能く政治局委員中の中央直轄市首長を標的に選んで来た。江沢民は全権掌握が完了した翌年（1995）に陳希同（1930～2013，北京市委書記）を槍玉に上げ、王宝森副

市長（1935～95）汚職・変死事件に由る引責辞任（4.27）→重大な問題に対する立件調査（7.4中央決定）→政治局委員・中央委員の職務停止（14期5中全会〔9.25～28〕決定）→党籍剥奪・党内外全職解任（97.8.29中央紀律検査委員会決定）を経て、98年8月31日に北京市高級人民法院（高等裁判所）で汚職・職務怠慢に由る懲役16年の判決が下された。胡錦濤は2006年9月24日の政治局常委会議決定で陳良宇（1946～）の上海市委書記を免職し、党籍・公職剥奪（07.7.26政治局會議決定）と収賄・職權乱用に対する懲役18年（08.4.11天津市第2中級人民法院判決）に処した。次の薄熙來失脚で図らずも出来た北→南→西の地方諸侯異端者に対する摘発の連鎖は、2016年9月10日に到頭4直轄市中の残りの天津に及んだ。政治局入りがあり有力視された党委書記代理兼市長黃興國（1954～）は紀律違反容疑で審査を受け、翌年1月4日に中紀委の決定に由り党から除名され、9月25日に石家莊市（河北省省都）中級人民法院で収賄罪に由り懲役12年と為った。黃は浙江省副省長・省委副書記在任中（1998.1～2003.11）に省委書記（02.11～07.3）の習に近付き、16年1月8日の會議で率先して習を「核心」と鼓吹した事で習派の主力と印象付けたが、「兩陳」・薄より格下ながら政治局成員及び予備軍の立場の不安定を再認識させた。孫は第12期全人代第4回會議閉幕（2016.3.16）時に議長席で唯一習と握手でき特別視されたが、直轄市首長順次転落の2巡目開始かと思われる電撃的な失墜は、最高指導部へ昇進する道が棘や地雷原に満ちている事を思い知らせた。

房峰輝・張陽は「18大」の前月に総參謀長・総政治部主任と為っただけに劇的な反転と言え、解放軍4総部の序列1・2位の総參謀部・総政治部の首長の同時肅清も前代未聞である。毛沢東時代の党・政・軍指導部の「高危」（危険性が高い）職位の筆頭は党のNo.2であり、毛は「癡」の字形と通じる病的な猜疑心から後継予定者を相継いで死に追い込んだ。軍委主席と日常的な運営を担う筆頭副主席の下で全軍の軍事面の統率に当る総參謀長は、政權の産婆・守護神を為す武装力の要である故2番目に危険視されていた。第2代（1954.11～58.10）の粟裕（1905～84、大將〔1位〕）は、軍委擴大會議（58.5.27～7.22）で「反党」「極端的個人主義」等の非難で厳しい査問を受け、8月31日の政治局會議決定に由り総參謀長の職を解かれて軍事科学院副院長に左遷された。黃克誠（1902～86、大將〔3位〕）も就任（58.10）から11ヵ月で廬山會議後に解任され、次の羅瑞卿（1906～78、大將〔8位〕）は65年12月8～15日の政治局擴大會議（上海）で批判され、黃と同じ「反党集團」のNo.2とされ翌年3月8日の自殺未遂まで追い詰められた。同年8月に代総長（総參謀長代理）と為った楊成武（1914～2004、初代上將〔10位〕）は、68年3月22日に突如「叛徒」等の罪名で空軍政治委員・北京衛戍区司令員と共に逮捕された。後任総長黃永勝の林彪事變（1971.9.13）後の失脚で空席状態が2年続いたが、73年12月に任命された鄧小平は76年初頭から全ての実權を奪われた。22年に亘って1人も全う出来なかった事は党・軍内の凄惨な政争の典型例に挙げられ、「文革」後41年の間に同職が安泰でいられたのは過去への反省も一因かと思えるが、それだけに房総長の電撃失墜は毛

の鉄拳の猛威を思い起させて衝撃が大きい。軍事指揮力より党・党首への忠誠心で選ばれる総政治部主任は相対的に危険性が低く、建国時から半年務めた初代の劉少奇の16年後の失脚はこの経歴との関連性が無い。第2・4代(1950.4~56.12, 61.1~63.12)の羅榮桓(1902~63, 元帥[7位])は毛から厚く信頼され、建国後3回しか無い追悼会への出席の2回目が彼の「公祭」(公葬)大会である。平時の失脚者は「反党宗派頭目」と決め付けられた譚政(原名世名, 1906~88, 大将[5位])だけで、4代目(64.9~67.8)の蕭華(1916~85, 初代上将[17位])は「文革」の全面粛清の犠牲者に数えられる。2年半の空席を埋めた李德生(1916~2011, 初代少将, 88年上将)は在任中(70.4~73.12), 10期1中全会(73.8.30)で副主席(5人中末席)に当選し2中全会(75.1.8~10)で辞任したが、政治局常委会から退かされたものの政治局委員・瀋陽軍区司令官の要職は解かれず、全会「公報」で発表された人事異動は鄧小平が副主席・常委に選出された事のみである。後任の張春橋は毛に後継者候補と目され副主席以下の常委序列1位・副総理2位に居り、副主席最下位・副総理1位の鄧への牽制は軍内の総政治部の監視・監督の役目とも通じ、両総部の微妙な関係も首長の同時失脚が通常考え難い一因として挙げられる。張は「4人組」逮捕後10期3中全会(1977.7.16~21)の決定で党籍永久剥奪・全職解任と為り、「林彪・江青反革命集団」特別裁判で執行猶予2年の死刑判決を言い渡されたが、同じ政敵排除の措置でも軍の制服組が標的と為らず今回とは性質が異なる。

中共の政争で敗れた要人は著書・題字の撤去と共に記録映像から抹消される事も可く有り、毛沢東追悼大会(1976.9.18)で天安門城楼に立つ20人の指導者の写真が典型例である。甲辞を述べる華国鋒第1副主席の左手の1人目が司会の王洪文(第2位の副主席)で、その左に江青と張春橋が未亡人と政治局常委の身分に由り順次に並び、江と同じ政治局員で張に次ぐ毛の秀才「親信」(側近)の姚文元(1931~2005)も、華の右側の葉劍英・宋慶齡(1893~1981, 孫文[1866~1925, 革命家・政治家, 中華民国・国民党の創建者]夫人, 国家副主席[2人中2位])の次に位したが、「4人組粉碎」後の公式報道では抜き取られて4ヵ所の奇怪・滑稽な空白が出来ている。2015年11月20日から中央電視台で放映された「文献片」(歴史記録映像番組/映画)『胡耀邦』(全5回)でも、「冥誕」(故人の誕生日)100歳を記念する習近平体制の厚遇は評価できるが、党中央文献研究室主導の制作で趙紫陽の存在を消す拙劣な改竄があったと指摘された。¹⁴⁾12期1中全会(1982.9.12~13)の報道で埋めた『人民日報』9月13日の第1版を映す場面で、小見出しの「胡耀邦 葉劍英 鄧小平 趙紫陽 李先念 陳雲為政治局常委」(「為」=と為る)の中の趙の名前は削られ、次の11字を順次前に移されている。史実を恣意に変える慣習に後ろ目痛さが無い所為か現物を弄る小細工は極めて粗末で、小見出しの横組の常識的な左右対称の構成を無視して、大見出しの「胡耀邦任総書記 鄧小平任軍委主席」(「任」=に就任す)の下のこの1行は、1字目が現状の儘に上の3字目と揃うのに最後の字が上の後ろから5字目と揃う、という一目瞭然の「造假次品」(偽物作りの不良品)が臆面も無

く出された。記事中の常委会名簿は肉眼で識別できない故か**不整合に無頓着**の6人の儘であるが、下の6常委の顔写真は上位4人が1列目、下の2人がその左側の胡・鄧の下に在るのに、趙の処に李の写真を貼り付けて2列目以下の部分を映さない様にしてある。胡の1986年の演説の動画でも近くの席に居た趙の姿が消えた等、「人間蒸発」（近年逆輸入された和製漢語）を含む抹殺が**報道倫理の許容範囲を超えている**。2005年1月18日の『人民日報』第4面の左下隅の死亡記事も**歴史から「除名」する意図が透け見え**、「趙紫陽同志逝世」（「逝世」=逝去。太い下線は死亡記事の表記）の題の下の、「趙紫陽同志長期患呼吸系統和心血管系統的多種疾病，多次住院治療，近日病情惡化，經搶救無効，於1月17日在北京逝世，終年85歲。」（趙紫陽同志は長期に亘って呼吸器・心血管系の複数種類の疾病を患い，入院治療を繰り返したが，近日に病状が悪化し，緊急治療の効き目が無く，1月17日に北京で逝去し，^{しっぺい} 歿年85）という56字の記述は，略歴が全く無く**改革・開放初期の初代新総理・第2代新党首に対する冷遇を露骨に示した**。

対照的に1月9日の第1版に黒枠で囲う遺影付きの宋任窮（原名韻琴，1909生）の訃報が有り，中共中央東北局第1書記（1960.10～67.8）・中央組織部長（78.12～83.2）等を歴任した初代上將（19位）の長老は，大見出しの「宋任窮同志逝世」の前の小見出し「中国共産党的優秀黨員 偉大的共產主義戰士 / 傑出的無產階級革命家 我党政治工作的卓越領導人」（中国共産党の優秀な黨員 偉大な共產主義の戰士 / 傑出した無產階級革命家 我が党の政治工作の卓越した指導者）で讃えられ，文中の「宋任窮同志」の前に上記の4点・39字の「定語」（修飾語）に続いて，「中国共産党第八屆中央政治局候補委員，第十一屆書記処書記，第十二屆中央政治局委員，原中央顧問委員會副主任。中国人民政治協商會議第四、五屆全國委員會副主席」という70字の上級職位歴が綴ってある。主語の後「因病醫治無効，於2005年1月8日上午9点50分在北京逝世，享年96歲。」（病氣治療の効き目が無く，2005年1月8日午前9時50分に北京で逝去し，享年96）は，**要人の訃報の定型通り死亡時刻を明記した点も趙紫陽に対する非要人扱いを浮彫にし，142字（趙の場合の2.5倍）の全文の最後の「享年」も趙の「終年」の格下を思わせる**。『現代漢語詞典』の【享年】の語釈は「**囿敬辭，称死去的人活的歲数（多指老人）**」（囿尊敬語，死去した人の生きていた年数を称す [多く老人を指す]）で，用例の「～七十四歲」も主に老年（当該項目＝「**囿六七十歲以上の年紀。**」[囿60代以上の年齢]）に適用することを示す。【終年】は「**①囿全年；一年到頭；～積雪的高山。②囿指人去世時的年齡；～八十歲**」（**①囿1年中。1年の初めから終りまでの間。「終年雪が積もる高い山」。****②囿人が世を去った時の年齢を指す。「歿年80歲」**）の両義で，**②**は用例が「享年」より6歳上であるが敬老精神と関係無く尊敬語には為るまい。『広辞苑』の【享年】は「（天から享けた年の意）死んだ者がこの世に生きていた年数。死んだ時の年齢。行年^{ぎん}」の意で，「“一九十歲”“一十四有七”」の例に**世界一の長寿を誇る国情と年齢制限の無い平等性が現れる**。『日本国語大辞典』

の「〔名〕(天から享[う]けた年の意)この世に生存した年数。寿齡。年齢。よわい。行年(ぎょうねん)」に、用例の「*碧山日録-応仁二年(1468)一二月一六日“是日立春、余既享年四十九、有客咲曰、公還知_レ非耶、余曰、今日不_レ是、安知_レ非焉” *読本・椿説弓張月(1807-11)後・二二回“嘉応二年四月下旬、為朝伊豆の大嶋において自害す。享年三十三才と見えたり” *西国立志編(1870-71)〈中村正直訳〉八・二一“時に一千五百五十二年(天文二十一年)、享年四十有七なり”」、漢籍典拠の「晉書-安平献王伝孚伝論“位班_上列_レ、享年眉寿」が付いている。『広辞苑』『現代漢語詞典』とも不採録の「眉寿」は『日本国語大辞典』の説明の通り「〔名〕眉毛が長く白くなるほどの長寿。眉毛の長いのは長寿のしるしであるということから、長寿を祝っていう語」で、「詩経-小雅・南山有台“楽只君子、遐不_レ眉寿-」」に由来し、用例3点の初出「家伝(760頃)上(寧楽遺恨文)“於是大臣中心危懼、祈祷神祇、亦依三宝、敦求眉寿”」の様に古くから渡来した。両国共通の長寿年齢の雅称が「享年」の語源と為るのは長生願望が殊に強い中国らしいが、明治初期の「四十有七」が140年余り後『広辞苑』の用例に生きているのも興味深く、存命中の「享年」の自称も33歳で自害した場合の「享年」も現代の中国人には違和感がある。

『日本国語大辞典』の「う・ける【受・請】」の項の同形異字に有る「【享】(キョウ)」は、「神や先祖などに物をたてまつる。また、神などが供物をうける。転じて、身にありがたいものをうける。さずかる。“享年”“享受”“享樂”」である。『現代漢語詞典』の【享】の「① 享享受：～用 | 坐～其成 | 有福共～。② 〈書〉同“饗”。③ (Xiǎng) 囡姓 (① 享享受する。「楽しんで使う」「坐して他人の成果を得る」「幸せは皆で享受する」② 〈書〉「饗」に同じ。③ (Xiǎng) 囡姓の1つ) は、神・先祖に奉る意が無く「眉寿」の語源中の「楽」と重なる様に占有して楽しむことが主と為る。子見出しの【享福】【享樂】【享樂主義】【享年】【享受】【享用】【享有】【享譽】の中で、日本語に無いのは【享福】(=「享生活得安楽美好：享受幸福：老奶奶晩年可享了福了。」「享安穩に楽しく幸せに暮している。幸せを楽しむ。「お婆さんは晩年に幸せを満喫した」)と、【享譽】(=「享享有盛譽：～海内外。」「とても高い榮譽を享有する。「海内・海外で非常に高い榮譽を享受している」)である。【盛譽】の「囡很高的榮譽：享有～。」(囡とても高い榮譽。「とても高い榮譽を享有している」)に対して、『日本国語大辞典』の語釈「〔名〕盛んにほめること。盛んな名声」は、【盛譽】の次の【盛贊】(=「享極力稱贊：～演出成功。」「享極力稱贊する。「公演の成功を大いに稱贊する」)の意も含めるが、用例・漢籍典拠の「*明六雑誌-三七号(1875)賞罰毀譽論〈中村正直〉“遂に今日に至りその榮名盛譽は國王宰臣之を羨んで得ざるほどなるも” *新唐書-裴寬伝“捋_レ入_レ朝盛_レ譽寬政_レ、且言華虜猶_レ思_レ之”」が付くこの単語は、中国との「名の文化」の発達度の差を物語る様に『広辞苑』には入っていない。【享用】の「享使用某種東西而得到物質上或精神上的満足：拿出好酒供客人～。」(享ある物を使って物質的或いは精神的な満足を得る。「好い酒を出して客に楽しんで

もらう) に対して、『日本国語大辞典』の語釈は「『名』自分のものとして受け入れて用いること」で、「明治月刊(1868)〈大阪府編〉五“此職に任ずるものは修身之を享用(キャウヨウ)す”」等3点の用例は和製扱いとされるが、『漢語大詞典』の用例3点の初出「宋謝采伯《密齋筆記》卷五」は、和文初出の700年前に生れた政治家(1168~1231)の作品である。最後の「自由之理(1872)〈中村正直訳〉三“その心思の才、行為の才、快樂を享用するの才、漸々に増添するときば”」に、『広辞苑』の不採録で裏付けられた死語化の一因が窺える。字面にも快樂を享用する意と為る「享樂」は『現代漢語詞典』で、「働享受安樂(多用於貶義):~思想|貪図~。)(働安樂を享受する[貶す意に用いることが多い。「享樂思想」「享樂を貪る」]と、語釈・用例とも負の形象ばかりが前面に出る。【享受】(語釈=「働物質上或精神上得到満足)の用例も「貪図~」(享受を貪る)で始まり、「~權利|~貴賓待遇|吃苦在前,~在後」(「權利を享受する」「貴賓待遇を享受する」「人に先んじて苦勞を^な嘗め,人に遅れて楽しむ)と続く。『日本国語大辞典』の同項目は「『名』与えられた,ある物事を受けおさめること。多く精神的・物質的な利益を受けて,それを味わい楽しむことにいう」に、「経国美談(1883-84)〈矢野龍溪〉後・一三“人数の群居するは互に有無を交易して快樂を享受すべき為めなるに”」等4点の用例と、漢籍典拠の「後漢書-樊英伝“享-受爵禄-”」が示されているが、『現代漢語詞典』と逆の「精神的・物質的」の語順とは裏腹に即物的な内容が目立つ。

『広辞苑』の「①受けおさめて自分のものにすること」の次の「②精神的にすぐれたものや物質上の利益などを,受け入れ味わいたのしむこと」は、用例の「“自由を一する”“美の一”」も精神の次元に属する。【享有】の「權利・能力など無形のもを,生まれながらに身に受けて持っていること。“基本的人権の一”」と似通って、『日本国語大辞典』の説明は「『名』(享[う]けて所有する意)權利,能力,才能など無形のもを,生まれながら持っていること」で、和製漢語の用例(「修辭及華文[1879]〈菊池大麓〉説服」「民法[明治二九年][1896]一条」「帰去来[1901]〈国木田独歩〉一九」「助左衛門四代記[1963]〈有吉佐和子〉一・一)中の目的語は、其々「天理」「私権」「不羈,独立,自由!」「權益」である。『現代漢語詞典』の「働在社会上取得(權利,声誉,威望等)」「働社会で[權利・声誉・威望等を]取得する)は、日本語の生れ付きの自然所有の意と対極的に社会性・能動性を以て獲得するものであり、独立・自由・權益等は生来受けて備える事が無く自ら勝ち取らねばならぬという普遍的な認識を示唆する。用例の「~盛名|在我国,男女~同等的權利。」「(盛名を享有する)」「我が国では,男女は平等の權利を享有する)は名・利に^{またが}跨り,「盛名・享譽」と日本語の「享有・享受」の挙例の「人権・自由」と照らせば価値追求の違いが見える。『人民日報』2005年1月16日の第1版の上段に、「宋任窮同志遺体在京火化」(宋任窮同志の遺体北京で荼毘に付す)と題した記事が出ている。副題「胡锦涛江泽民呉邦国温家宝賈慶林曾慶紅黄菊呉官正李長春羅幹等到八宝山革命公墓送別」の通り、現・前党首と他の政治局常委全員が八宝山革命公墓に行つて遺体送別儀

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方 (1) (夏)

式に参列した。会場の花輪を背景に喪章を付けた胡・江が車椅子に坐る遺族と握手する写真が2枚有り、記事中「沈痛悼念宋任窮同志」(宋任窮同志を痛切に哀悼する)と書く横断幕が報じられた。告別式の後に追悼会が開かれず党中央の公式評価と為る弔辞も無かったのは、故人の遺志に由る事なのかは不明であるが要人葬式を簡素化する時流に合っている。第4版を丸々使い写真も8枚入れた特別記事「宋任窮同志生平」(宋任窮同志の一生)は、生涯の事績の紹介・礼賛で言わば紙上追悼会と後世に伝わる党の評価を為している。満95歳の大往生も死後の「享譽」も「喜喪」(目出度い弔事。『現代漢語詞典』の語釈 = 「[圀]指高寿的人去世的喪事」[圀]長寿者が逝去した場合の弔事を指す)に当て嵌るが、これが最後に目にした党中央機関紙であろうと思われる趙の場合とは雲泥の差が有る。【享年】例示の74歳は中国人の平均寿命の2006~08年(男性は更に約10年後)の数値で、日本で31年前に達成したこの水準を享年の典型としたのは平均寿命への到達の有り難さ、及び人生を貪欲に享受する意志が強い中国人の達成感・諦観の現れとも取れるが、満84歳まで生きた趙は然る可き礼遇は皆無で「享年」の尊敬表現さえ避けられた。尤も彼は晩年に基本的な人権・自由を充分に享受できなかったから、「終年」は当局の意地悪の有無に関らず実情に忠実で故人の思いを汲んだ修辭でもある。

苛政・肅清に見る天数と国共同根

宋任窮の誕生日(7.1)は「優秀黨員」として名誉にも「党慶」(建党記念日)に当るが、『現代漢語詞典』の「【七一】 Qī-Yī」(固有名詞に付き人名・国名・地名・王朝名等と同様、発音表記の冒頭は大文字)は、「[圀]中国共産党誕生記念日。1921年7月23日中国共産党召開第一次全国代表大会、宣告中国共産党正式成立。1941年党中央決定以召開這次大會的7月份的第一天、即7月1日、為党的誕生記念日。」(圀中国共産党の誕生記念日。1921年7月23日、中国共産党は第1回全国代表大会を開催し、中国共産党が正式に成立することを宣言した。1941年、党中央は当大会開催の7月の初日、即ち7月1日を党の誕生記念日と為すことを決定した)と説明されている。2ヵ所の「誕生記念日」は旧版で「建党記念日」と「生日」(誕生日)に作り、「23日」は「下旬」(初版[1979.12]の「1日」を改めた第2版[83.1]の表現)に対する修正、「宣告中国共産党正式成立」は初版の文言の復活である。建党20周年の際「1大」代表の毛沢東・董必武(原名賢琮、1886~1975)は開幕日を思い出せぬ儘、「8.1」建軍(27年南昌[江西省省都]蜂起)記念日も意識したのか確信が無い「7.1党慶」を決めた。1979年に漸く特定・公表した後も便宜的な記念日は毛沢東時代の伝統を踏襲して来たが、『現代漢語詞典』の正確な記載は78年末の初版から35年後に初めて出来た。大暑に当る時節は熾烈な「党争」(党内・対外の闘争を表す造語)の遺伝子^{D N A}を思わせるが、上海の仏蘭西租界の会場に巡查が訪れた事で浙江省嘉興に移った日は今だに確証が得られず、閉幕が7.30~8.5の間(8.3が有力

15) としか推測できない事は党史に多い謎の1つである。毛は1959年の廬山会議で彭徳懐の「大躍進」批判を反駁する講話で流れを変えたが、政治局拡大会議（7.2～29）の全体会議を緊急召集したのは奇しくも中共成立38周年の「7.23」である。建党90周年の日（2009.7.23）に「1大」所縁の浙江で高速鉄道衝突脱線事故が起き、多重過誤^{ミス}に由る40人死亡・192人負傷の惨劇と鉄道部の乱暴な対応が民衆の激憤を招き、報道媒体^{メディア}・^{ネット}・^{ネット}上の指弾の嵐に度肝を抜いた当局は8月1日から言論封殺の拳に出た。発生地^ミの温州は改革・開放後の急速な富裕化に由って「資本主義の温床」と呼ばれ、基督教等の宗教の教会・信者が密集する故「中国のエルサレム」の異名も有る。欲望や緊張に満ちた地で表面的な繁栄の裏の様々な欠陥が泡沫破裂の様に噴出した事は、後の高成長→中高成長の減速の「新常态」^{ニューノーマル}化を見ても黄金期の終焉の起点の様に思え、満90歳と為る日に中共が歴史の^{ターニング・ポイント}転換点に差し掛った事は神秘で恐ろしい天数を感じさせる。

「天数」は『広辞苑』で「自然の命数。自然の運命。天命」と解説され、『日本国語大辞典』の語釈は「『名』天から与えられた寿命。天寿。自然の運命。天命」で、「空華集（1359-68頃）一一・石林横川諸老墨蹟後叙「天數否而元氏已，國步泰而大明興」等2点の用例は、「荀子一王制“夫兩貴之不能相事，兩賤之不能相使，是天數也”」に由来した。『現代漢語詞典』の「^た迷信の人把一切不可解的事、不能抗御的災難都歸於上天安排的命運，稱為天數。」（^た迷信家は全ての不可解な事や不可抗力の災難を、天が定めた運命に歸し、天數と稱す）は、中共の思想原理や科学的な思考に基づく否定的な判断を示しているが、「巧合」（偶然の一致）の様^たに映る一連の「7.23」事件の類の天數は天理・天啓を秘める。建国10周年直前の廬山會議で失脚した黄克誠は皮肉にも誕生日（10.1）が国慶節であり、26年後の同日に生れた第5代総理（1998.3.17～2003.3.16）と第14～15期政治局常委の朱鎔基も、共和国の肅清の凄さを物語る様に30歳時の58年に「大躍進」批判に由り党から除名された。彼は国家計画委員会主任辦公室副處長在任中に「右派分子」の断罪で左遷され、20年後に名誉・党籍が回復され中国社会科学院工業經濟研究所投資・市場研究室副主任と為り、10年後に上海市長に就任（翌年に総書記に拔擢された江沢民の後任の市委書記に昇格）し、更に10年後に史上初の党籍「罰1」経験者として政府首腦（党内序列3位）の座に就いた。初代総理周恩來の誕生日（3.5）は生誕80周年の1978年に全人代全会の開幕日に選ばれ、後世の追慕を体現して95年以降（鄧小平逝去直後の97年を除く）恒例化して来たが、彼の毛沢東（9.9）・林彪（9.13）に次ぐ3番目に有名な中共要人の命日（1.8）は、29年後の宋任窮が死去した日でもある。周・毛が逝った1976年の「7.1党慶」は毛の前任党首張聞天（又名洛甫，1900.8.30生）が急逝した日で、35年の遵義會議で総書記に当選した張は政治局委員候補・外交部常務副部長（筆頭外務次官）在任中、毛の經濟冒險に異論を唱える義挙で「彭黄張周反党集团」成員とされ、中国科学院哲学社会科学学部（中国社会科学院の前身）經濟研究所特約研究員への左遷を経て、「文革」中

に自宅で523日(68.5.17~69.10.20)に及ぶ北京衛戍区兵隊の「監護」拘禁を受け、更に放逐先の広東省肇慶^{ちやう}から北京への帰還を毛に却下され江蘇省無錫での定住を命じられた。マルクス主義の研究を已まぬ理論家の彼は「7.1」『人民日報』社説への失望を夫人に吐露し、数時間後に心臓発作で17年に及ぶ失脚・失意の晩年の幕を閉じた。悪名高い「文革」中の同紙言説中の1974年「7.1」社説に出た毛語録の43年後の党規約入りは、「文革」礼賛・粉飾の論調が針金で鬱憤の死に至った張が黄泉の下で知ればどう思われよう。

その死亡記事は13日の江蘇省委機関紙『新華日報』に「張聞天同志逝世」の題で出て、78字の全文は「中国科学院哲学社会学部経済研究所特約研究員張聞天同志、因長期患心臓病、医治無効、於一九七六年七月一日在江蘇無錫病故。張聞天同志、一九二五年加入中国共産党。終年七十六歳。」(中国科学院哲学社会学部経済研究所特約研究員張聞天同志、長らく心臓病を患い、治療の効き目が無く、1976年7月1日に江蘇無錫で病歿した。張聞天同志は、1925年に中国共産党に加わった。歿年76歳)と為る。¹⁶⁾ 趙紫陽の死亡記事より22字多く入党時期の記載は趙の党員の属性の欠落に気付かせるが、丁寧語の「病故」は「逝世」ほど鄭重でなく地方紙の片隅に止まるのも格下の扱ひである。改革・開放後の名誉回復の儀式として8月25日に党首華国鋒等が出席する追悼会が開かれ、鄧小平は弔辞で林彪・江青集団の迫害に由る死を「含冤逝世」(怨みを抱いて逝去)とし、短い存命年数や年齢に関らぬ事故・事件に由る死等の非円満死亡を表す「終年」を使った。「非円満死亡」は1959~61年の大飢饉や「文革」の所謂「非正常死亡」に擬えた造語であるが、前者の死者数は日本軍の南京大虐殺(37.12)の30万人説(江沢民首唱)の100倍に当り、鄧小平・胡耀邦等が推進した「文革」後の「撥乱反正」(混乱を收拾し正常を回復する)は、犯罪的な大失政への清算と無数の「冤魂」(「冤罪等に由る」怨恨を抱く亡魂)への鎮魂に他ならない。宋任窮も1員(異説有り)とされる鄧小平時代の「8大元老」のNo.2陳雲(原名廖陳雲、1905~95、元副主席[最高序列5位]・副総理[2位])は、建国後の「経済戦線」大御所の智慧を以て1982年に「鳥籠^{とりかご}経済」の理論を打ち出し、計画経済・市場経済を其々主・副次的とし制御の中で適宜な自由度を与えようと説いた。「鳥籠^{とりかご}経済」「長老治国」の並行で1980年代の中国は独裁開発の成長と波乱を繰り返したが、鳥を逃さず握り潰さず籠に収める柔軟な統制は今度「6.4」後の趙紫陽に適用された。『現代漢語詞典』の【終年】①副の同義語【終歳】の次の【終天】は、①「[副]終日」(用例=「~発愁|~不停地写」(「1日中悩む」「終日書き続ける」)の他、②「[書] 囹終身(就遺恨無窮而言)」「[書] 囹終身[遺恨が尽きないことに就いて言う]」の意も有り、用例の「~之恨|抱恨~」(「一生の恨み」「一生恨みを抱く」)は苛政の犠牲者が多く持つ。

「軟刀子殺人」(真綿で首を絞める)の誹りも有る趙紫陽の軟禁死は「終年」が適切で、党中央機関紙に死亡記事が出て「同志」と称された処は「文革」時代より益^ましである。4代前の党首は骨壺に放逐中の変名「張普」と書かれ夫人の花輪にも実名の記載は許されず、命並みに重

い名（例えば「亡命」の原義は「命」[名籍]の喪失）に対する抹殺は徹底された。当時の『人民日報』の不見識は1975年4月7日の同じ第4版の右下の死亡記事にも見られ、^{まとも}真面な報道らしくない題の「蒋介石死了」（蒋介石死んだ）から敵意を剥き出し、劈頭の「国民党反動派の頭子、中国人民の公敵蒋介石、四月五日在台湾病死。」（国民党反動派の頭、中国人民の共通の敵である蒋介石は、4月5日に台湾で病死した）は、断罪調の修飾語とぞんざいな非丁寧語「病死」を使い歿年の記述も無い。「蒋介石自從一九二七年背叛孫中山先生領導的民主主義革命以來、一直作為帝國主義、封建主義、官僚資本主義在中國的代價、堅持反共反人民、獨裁賣國。他雙手沾滿了革命人民的鮮血。」（蒋介石は1927年に孫中山氏が指導した民主主義革命を裏切って以來、一貫して中国に於ける帝國主義・封建主義・官僚資本主義の代表と為り、反共・反人民を堅持し、獨裁・賣國を行った。彼は両手に革命的人民の真っ赤な血で^{まみ}血塗れた）という論評は、国共連合の抗日戦争で統帥を務めた8年間の貢献まで「一筆抹殺」の対象とした（この四字熟語は『現代漢語詞典』の通り、「比喻輕率地把優點、成績等全部否定。」[長所・成果等を輕率に全部否定する事を喩える]）。30年後の5月11日の第4版の右下の政敵の死亡記事は流石に「死んで了った」の発想が無く、「張春橋病亡」（張春橋 病気で死亡）の題で、「林彪、江青反革命集團案主犯張春橋因患癌症，於2005年4月21日病亡。張春橋，88歲，於1981年被最高人民法院特別法廷判處死刑，緩期二年執行。1983年減為無期徒刑，剝奪政治權利終身。1997年12月減為有期徒刑18年，剝奪政治權利10年。1998年1月保外就醫。」（林彪・江青反革命集團事件の主犯張春橋は癌を患った故、2005年4月21日に病気で死亡した。張春橋，88歲，1981年に最高人民法院特別法廷より執行猶予2年の死刑に処された。1983年に無期懲役に減刑され，政治的權利的終身剝奪と為った。1997年12月に懲役18年に減刑され，政治的權利の剝奪は10年と為った。1998年1月に保証人を立てて監獄外で病氣治療を受けた）と記す。「終年」も無い半面「病死」ほどぞんざいでない「病亡」を使い、**刑罰歴の羅列は死刑も有り得る峻厳さと共に「保外就醫」の部分的な自由の余地を示している。**内容はともかく121字は95日前に逝った趙紫陽の死亡記事の2.16倍に相当し、**元党首に対する「一筆抹殺」が評価も一切避けるほど徹した事を思わせる。**

第2代党首の瞿秋白も「文革」初期に^{いわ}謂れの無い「叛徒」の烙印^おを捺されて、紅衛兵に要人・著名人用の北京八宝山革命公墓に在る墓を破壊されたが、**趙紫陽が受けた仕打ちは張学良（1901～2001）に対する蒋介石の嚴罰並みに酷い。**旧東北軍総帥の張学良（国民革命軍1級上將）は西安事變（1936.12.12）を主導し、中共軍討伐の督戦に來た蒋介石を監禁して内戦停止・一致抗日の要求を突き付け、周恩来の斡旋も有って国共合作に由る抗日民族統一戦線の結成の契機を作った。張は讓歩を引き出した後25日に蔣を釈放し謝罪の誠意表示として南京まで御^お供したが、**熱血漢の義侠心から自ら望んだ国民党軍事委員會高等軍法會議の裁判で、上官に対する暴行・脅迫の罪に由り31日に懲役10年・公民權剝奪5年を言い渡された。**蔣は4日後に

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方 (1) (夏)

原判決を特赦する代りに軍委の「厳加管束」(嚴重な強制監督)の下に置くと決め、実質的な終身刑の心算の報復措置は最後に当初の刑期より数倍も長い準無期懲罰(造語)と為った。張と手を組んだ西北軍総帥の楊虎城(原名彪, 1893~1949, 2級上將)は、海外への逃避行を強いられた後に日中戦争の勃発(盧溝橋事変, 37.7.7)で帰国したが、報国の熱意が蔣の冷酷な報復に遭って到着(11.30)後直ぐ秘密裡に妻子と共に監禁され、重慶陥落(49.11.30)前の9月17日に蔣の命令に由り本人と子女2人(夫人は2年前に虐待死)、秘書夫妻及び男児、副官、警備兵の8人が惨殺された。10歳未満の楊の長女・秘書の長男まで首を絞めた上に^{ナイフ}刺殺し、楊父子の遺体を諜報機関構内の花壇に埋める際に硝酸で顔を潰した鬼畜の業は、曾て革命家陶成章(1878~1912)を自ら拳銃で暗殺した蔣の残忍非道と、恐怖統治で22年余り維持した独裁政権の大陸敗退の必然性を思わせる。中曽根康弘は『自省録——歴史法廷の被告として』第3章第10節「鄧小平——偉大なる楽観主義者」で、当の小さい大人物の人格に能く当てて知りたい為に訊き出した体験談を次の様に紹介している。「八十年も中国革命のために献身してきて、一番嬉しかったことは何ですかと訊いたところ、“蒋介石を討伐して揚子江を渡った時だ。あの時は、作戦がことごとく的中した”と答えました。当時彼は、劉伯承が指揮していた第2野戦軍の政治主任だったそうで、“あんな嬉しいことはなかった”というのです。」1980年4月の訪中とした会談の時期は84年3月25日が正しい(80年もの献身とは満79歳の鄧が出生前から革命家であったとする過分な贅辞であるが、80年4月だと鄧は数え歳でも77なので増々^{つじつま}辻褄が合わない)し、「政治主任」も党中央顧問委員会初代主任(82.9.12~87.11.2)の職名と混同した誤記である。解放軍の建国前の野戦軍は第1~4(西北・中原・華東・東北)の様に超広域の編制で、鄧は「2野」で司令員の劉伯承(1892~1986)と同格の政治委員を務め、第2・3野戦軍合同の淮海戦役で指揮機構の前敵委員会の長(書記)に任ぜられた。『鄧小平文選』第3巻(中共中央文献編輯委員会編, 人民出版社, 1993)所収の「發展中日関係要看得遠些」(中日関係を發展させるには長い目が必要だ)と題した談話は、「在我一生中、最高興的是解放戦争の三年。」(私の一生の中で、一番嬉しかったのは解放戦争の3年だ)と言う。軍史上最大の勝利の淮海戦役を飛ばして3大戦役後の渡江(長江横断)戦役だけを挙げるとは、晩年に昔の戦功を宣揚して已まぬ鄧らしくないから中曽根の記録又は記憶の不備であろうが、あの3年は中共史上有数の輝かしい時期と共に国民党の最も暗愚・腐敗の時期と言える。

蒋介石は1948年8月19日に党中央政治会議を経て總統名義の「財政經濟緊急令」を発表し、^{ハイパー・インフレーション}天文学的な超絶通貨膨脹を止める為に金融改革・^{ありようじ}經濟統制の荒療治に踏み切った。長男経国(1909~88)は上海經濟督導員として悪徳商人摘発の「虎退治」に張り切ったが、總統夫人の宋美齡(1897~2003)の干渉で宋家企業の取締が頓挫し市民の信頼を失った。11月1日の物価管制の敗北宣言と3日の翁文灝(1889~1971)内閣総辞職は、蔣政権の破局を速めた遼瀋戦役終了(2日)・淮海戦役開始(6日)と重なって、国民党は身から^{さび}出た錆で自滅し1年で大陸

を放棄して遁走先の台湾に全存在を託した。2代に亘る「蒋家王朝」では失政の反省から「白色恐怖」の度合を徐々に抑え、経済優先の開発独裁で高度成長を遂げ1人当り域内総生産^{GDP}が早くも対岸の敵を抜いた。台湾時代の早期に絶対集権を強化する為の要人粛清では、中共間諜である国防部中將参謀次長の呉石（1894～1950）の処刑が別格として、陸軍総司令・前台湾衛戍司令の孫立人（1899～1990、陸軍2級上將）の失脚が最大である。孫は蔣の専制に不満を抱き米国軍事顧問団と密接に交流した為蔣の不審・不信を招き、1954年6月に突然陸軍総司令を罷免され総統府参軍長の閑職に追い遣られ、翌年8～10月に部下の政変嫌疑で解任・軟禁処分を言い渡され、88年3月22日の解除まで32年余り自由を奪われた。国民党主席（1975.4.28就任）・総統（同78.5.20）の蔣経国の死去（88.1.13）後、その治下で軟化した張學良への監禁も後任総統（～2000.5.20）の李登輝（1923～）に由って解除され、91年6月1日（90歳の誕生日の前々日）の社会復帰を経て米国の布哇^{ハワイ}に移住し、100歳の誕生日を過ぎた後01年10月24日に天寿を全うした。54年に及ぶ拘禁は台湾の38年もの台湾戒嚴と同様この上無く異常な事であるが、蒋介石の非情は「泄私憤」（私憤を晴らす）や「立威」（権威樹立）の為に他に、孫立人事件にも窺える様に自ら被害を蒙った「兵変」（軍事政変）への恐怖も根底に有ろう。

第1次国共合作（1924.1.20～27.7.13）の時に国民党中央執行委員候補・中央宣伝部長代理を務めた事が有る毛沢東は、国共両党の一卵性双生児めく同根性を体現する様に「老朋友」（旧友）と称した¹⁷⁾ 蔣に似通って、軍の掌握と叛乱の防止に腐心し1個連（中隊）の移動も軍委主席の許可が要ると定めた。1967年7月20日に視察先の武漢の宿泊先で軍内「造反派」の騒ぎが起きた時、「兵変」と勘違いして安全上20年間も中央に使用を禁じられていた空路で上海へ脱出した。3年後の9期2中全会で威信を守り側近を庇う為に林彪一味と衝突した際、中央・政治局に高い比重を占めた軍の勢力の不気味な膨脹と不穏な動きへの疑心暗鬼から、夜に宿泊先の別荘を新築の盧林1号から目立たぬ河東路175号に急遽^{きょ}変えて戒嚴した。¹⁸⁾ 林彪集団への包圍網を作る為の1971年「南巡」（8.15～9.12）でも杭州滞在中、林の勢力圏に身を置く状況に不安を覚えて当地の党・政・軍首長に別れを告げずに去り、脱兎の如く北上した専用列車を北京駅の手前の豊台に変則的に停めさせ、李徳生（北京軍区司令員）・紀登奎（1923～88、政治局委員候補・國務院業務小組成員〔副総理格〕・軍委領導〔執行部〕成員）・呉徳（1913～95、北京市革命委員会〔“文革”中の地方政府に代る権力機構〕副主任）・呉忠（1921～90、北京衛戍区司令員、初代少將）を車内に召集して、中央警備団を司る汪東興の同席の下で林との路線闘争を展開する意向を仄めかし、最後に李を残して38軍の1個師（師団）を首都中心部の西北側の50^{キロ}に在る南口に配置せよと命じた。当夜に林彪が河北省山海関の海軍航空兵空港から発ち蒙古方面へ向って行くのを聞いて、中南海に対する政敵の襲撃に備えて砲撃・空爆にも耐え得る人民大会堂に移動・宿泊した。¹⁹⁾

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方 (1) (夏)

林彪夫妻と共に墜落死した長男立果 (1945~71, 空軍司令部作戦部副部長) の所謂「毛沢東暗殺計画」は、具体性・信憑性が薄いながら「林彪反党集団」一掃を正当化する当局の根拠の一部とされた。後の軍内粛清は事変中に空軍の監視役として手柄を立て副主席在任中の李徳生にも及び、彼は1974年の大軍区責任者会議 (8.26~9.10) で林との関り等に就いて執拗に追究され、瀋陽軍区司令員の彼と同格の政治委員、毛の甥遠新 (1941~) 等から誹謗・中傷された。²⁰⁾ 北京軍区司令員の「高危」^{ハイ・リスク}の前例には李の前任の鄭維山 (1915~2000, 初代中將) も有り、彼は廬山会議後に陳伯達の失脚に巻き込まれ李雪峰と共に解任・党籍剥奪に処され、安徽の農場に8年も幽閉された後79年に名誉が回復し82年に蘭州軍区司令員に就任した。楊成武総参謀長代理と一緒に電撃逮捕された3将領の内の傅崇碧 (1916~2003, 初代少将) は、北京衛戍司令員を解かれ6年の人身自由の喪失を経て77年9月に現職に返り咲きしたが、その受難は北京軍区司令員とも重なる様に首都防衛責任者の危険性を思い知らせる。後任の温玉成 (1915~89, 初代中將) は副総参謀長を兼任し、政治局に代る中央文革碰頭会 (連絡会議) と军委辦事組の成員でもあったが、政治音痴の所為で林彪閥と江青閥の間に板挟みと為って双方に見切りを付けられ、「9大」主席団 (議長団) の主要成員14人の中で唯一政治局入りが出来なかった。

初日の主席団秘書処の「新聞公報」^{プレス・コミュニケ} (「新聞」=報道) は翌日の『人民日報』に掲載され、中の主席団 (176人) 名簿は他者より大きい字の「毛沢東主席 林彪副主席」が出て、1行空けた下の行は1列横並びの「周恩来 陳伯達 康生 江青 張春橋 姚文元 謝富治 黃永勝 吳法憲 葉群 汪東興 温玉成」, 又1行空けた下の行は「董必武 劉伯承 朱徳 陳雲 李富春 陳毅 李先念 徐向前 聶榮臻 葉劍英」と為り、更に1行空けた下からその他多勢^{たぜい}の氏名が普通に記された。毛・林以下の全9行の冒頭の字は2行目の「周」を始め最上段の「沢」と揃う位置に在り、領袖と肩を並べてはならない恐れ多い畏敬が可視的に表現されている。活字の寸法や肩書で示された別格の正・副主席の下の周~温の12人は主流派の面々で、「左側=格上」「左派=革命的」の意味で主席台 (議長席) の最前列中央の毛の左側に着席し、毛に「右 (保守) の代表」とされた董~葉の10人は右側に配された。最終日の大会主席団秘書処「新聞公報」では、「今天在主席台前列就坐的, 有: 周恩来、(中略) 温玉成同志。」(本日議長席の前列に就く [指導] 者には, 周恩来・[中略] 温玉成同志が居る) の次に、改行して「還有: 董必武、(中略) 葉劍英同志。」(又, 董必武・[中略] 葉劍英同志も居る) と、嫌らしい「另類」(異種)・「另冊」(盜賊・悪者等を記し良民の「正冊」と区別する古い時代の戸籍簿, 転じて差別される人・物事の類) 扱いをしている。席次と記載順・名簿形式・報道表現に見る格差は動乱中の榮辱と権勢の強弱を映し出すが、政界の盛衰・浮沈の転変の激しさを現す様に直後の9期1中全会 (4.28) で反転が起きた。

新しい政治局には傍流の董必武 (国家副主席 [1位])・劉伯承 (军委副主席 [7人中5位]),

元帥 [4 位]・朱徳 (1886～1976, 全人代常委会委員長, 元帥 [1 位])・李先念 (1909～92, 副総理 [9 位] 兼財政部長・前中央書記処書記 [10 人中末席])・葉劍英 (原名宜偉, 1897～1986, 前中央書記処書記 [9 人中末席]・軍委副主席 [7 人中末席] 兼秘書長, 元帥 [末席の 10 位]) が当選し, 毛・林派の周恩來～葉群は委員, 汪は紀登奎・李雪峰・李徳生に次ぐ委員候補 (末席) と為ったが, 4 日前の大会最終日にも最前列の端に居た温は圏外に置かれるという窮極の屈辱を喫した。通常閉幕の翌日に行う指導部選挙は熾烈な権力闘争の為に異例の大幅で延期したが, 数日の間の激変は駆け引き・取引の結果として毛・林夫人の直前内定と共に, 日本流で言う「一寸先は闇」「一寸先は地獄」の様な不確定性と危険性を感じさせた。温は翌年に林に由り成都軍区第 1 副司令員に左遷されたのに, 「9.13」の 3 日後から「林の死党」嫌疑で 5 年間拘禁され, 更に 7 年後に処分に値しないとの審査決定が下された。²¹⁾ 彼の後任は毛から「呉・無」の同音 (wú) を振って「呉忠有忠」(呉忠に忠有り) と褒められ, 林彪事変と「4 人組」逮捕での貢献に続いて対越南戦争で前線の指揮に当たったが, 北京衛戍区司令員在任中の林・江との関係や第 1 次天安門事件の責任を追究されて, 戦争開始の 4 週間前に広州軍区副司令員を免職され, 軍区司令員許世友の容認で大任を遂行した後に取り調べを受け 8 年後に漸く容疑が晴れた。²²⁾ 国民党陸軍総司令・台湾衛戍司令孫立人の 32 年も続いた軟禁よりは益しであるが, 「天子の膝元」の「御林軍」(親衛隊) の長は重用の重圧で失墜の恐れも伴う。北京軍区司令員・総参謀長の 2 大「高危」職を歴任した房峰輝の失脚は必然性も感じられるが, 北京衛戍区司令員も合せて離任後を含めて無傷でいらなかった「文革」時代が想起される。胡錦濤が大閱兵で総指揮の彼の敬礼・報告を受けるという名誉な場面は消されて行こうが, 前党首の顔に泥を塗る様な蛮勇も辞さぬ習近平の鉄槌連打は情勢に迫られた理由が有る。

「亡党亡国」の危機に由る「反貪腐」の必然性

林彪が深夜に不帰の旅へ発つ日の昼に毛沢東が召集した 5 名の要人の中で, 寵臣の紀登奎・呉徳・汪東興は第 10 期政治局に入り (汪は委員候補), 華国鋒時代に其々国务院副総理・全人代常委会副委員長・党中央副主席と為ったが, 陳錫聯 (1915～99, 政治局委員・副総理・軍委常委・北京軍区司令員, 初代上将 [32 位]) と共に, 改革・開放元年の翌年の 11 期 5 中全会 (80.2.23～29) で辞任に追い込まれた。「文革」を清算し華の支持基盤を削ぐ鄧小平等の改革派に敗れた結末であるが, 北京軍区司令員は初代 (1955.4～58.9) の楊成武・2 代目の楊勇 (原名世峻, 1912～83, 上将 [53 位])・3 代目 (63.6～71.1) の鄭維山・4 代目の李徳生・5 代目 (73.12～80.1) の陳錫聯まで, 四半世紀の間に全員が相継いで迫害・冤罪・左遷・退場等の形で失脚した (副総参謀長兼務の楊勇は「文革」初期に打倒され, 林彪事変の翌年に瀋陽軍区副司令員として復活した)。北京軍区の政治委員も 2～6 代目は在任中か離職後乃至死後に不名誉な待遇

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方 (1) (夏)

を受け、病気で依願退職した朱良才（1900～89，上将 [38 位]）に次ぐ頼伝珠（1906～65，上将 [20 位]）は、58 年 11 月に就任し彭徳懐・黄克誠粛清後の 59 年 10 月に瀋陽軍区第 2 政委に左遷され、次の廖漢生（1911～2006，初代中將，初代 [54.9 就任] 国防部副部长 [7 人中末席]）は、姻戚の楊尚昆（1907～98，中央辦公庁主任）・賀龍（政治局委員・軍委副主席 [2 位]・副総理 [4 位] 兼国家体育委员会主任，元帥 [5 位]）の失脚の巻き添えで、「文革」初期から 5 年半に亘って迫害を受けた。4 代目（60.11～71.1）の李雪峰の後釜を埋めた謝富治（1909～72，上将 [49 位]）は毛の寵臣で，政治局委員・副総理（末席の 16 位）兼公安部長・北京市革命委员会主任等の要職を務めたが，80 年 10 月 16 日の中央決定で「文革」中の罪過を問われ，党籍を剥奪し，党中央に由る弔辞（公式評価）を取り消し，遺骨を八宝山革命公墓から撤去するとの処分を受けた。次（1972.3～77.9）の紀登奎の後任の秦基偉（1914～97，初代中將）は紀の失脚直前まで担当し，80 年 1 月～87 年 11 月の同軍区司令員で珍しい大軍区の軍事・政治工作の長の二重経験と為った。秦は建国 35 周年（1984.10.1）祝賀閱兵式総指揮として軍委主席の鄧小平の晴れ舞台を演出し，88 年 3 月から國務委員（副総理格）・国防部長を 1 期・5 年務め，同年 9 月に上将（「文革」後の最高階級，初代）が授与された。鄧小平・江沢民・胡錦涛時代には安定・発展を至上の任務とする基本路線も有って，大軍区司令員・政治委員以上の将領は概ね党の要人よりも政治生命を全う出来たが，習近平時代では 12 代目（2007.7～12.10）の北京軍区司令員の失脚の様に一変した。房峰輝は胡の引退間際の「生前贈与」として全軍の要を為す総参謀長（13 代目）に栄転し，軍総部の機構改革に由り 2016 年 1 月 16 日に初代聯合参謀部参謀長に鞍変えした。最重要の大軍区と全軍指揮の中樞の首長を両方担当した経歴は史上初で，第 4・5 代の間の総参謀長代理に当てられた楊成武は唯一その両職経験者に近い。贈賄の嫌疑に由る房の失脚は 49 年前の楊の冤罪に由る逮捕とは同日に論じ得ないが，2016 年初頭の諸総部の名称変更と大軍区撤廃・戦区制発足は「文革」時代を思い起させる。

総参謀長・総政治部主任に対する一斉摘発の「8.30」は 1973 年の 10 期 1 中全会の日であり，当時の異変として毛沢東は生前の最後と為る党大会の閉幕式及び中央全会を欠席した。北京五輪（2008.8.8～24）閉幕の 35 年前に当る「10 大」の初日には彼は開会を宣言したが，「主席講幾句不講？」（主席は少しお話しになりませんか）という周恩来の問いに否と答えた。中国語の「幾」（幾ら，幾つ）は 1～9 の数を表すので僅少の量を想定した質問であり，「講・不講」（話す・話さない）という複数の選択肢は講話の予定が無い事の傍証である。恒例の開幕の辞も無く単に議事進行・閉会宣言を行う毛の発声は文字通り数言しか無く，『毛沢東伝（1949—1976）』第 40 章「十大前後」の記載に拠ると，「請周恩来作報告」（周恩来に報告をお願いします），「請王洪文講話」（王洪文に講話をお願いします）の他，周が政治報告で「時代没有变，列宁主義的基本原則没有過時，仍然是我們今天指導思想的理論基礎。」（時代は未だ変わっておらず，レーニン主義は依然として我々の今日の指導思想の理論的基礎である）と述べた時，「哎，

不錯。」（うん、結構だ）と言葉を挟み、「応当強調指出：有不少党委，埋頭日常的具体的小事，而不注意大事，這是非常危險的。」（少なからぬ党委は，日常的・具体的な些事に没頭し，重要な事には注意を払わないが，これは非常に危険である，と強調的に指摘しなければならない）の処で，「対。」（その通り）と合いの手を入れた。最後の「報告完畢，今天就到此為止，散会！」（報告は終了した。今日は此処まで。散会！）も含め100字未満と為る事は，林彪事変の激甚な打撃に由る急速な身心衰弱の現れに他ならない。毛は「8大」で秘書の田家英（原名曾正昌，1922～66）が起草した2千字強の開幕の辞を述べ，「9大」の開幕の辞は会場の「万歳！」等の叫びと万雷の拍手で途切れ途切れになり，個人崇拜の有難迷惑の所為で20分の間649字しか話せず本人は興醒めて早く切り上げた。今回は中ソ局地武力衝突の準戦時下の前回と同じく人民大会堂の1階で極秘に開かれたが，偽装工作を兼ねて3階で亜細亜・阿弗利加・拉丁亜米利加卓球親善招待競技大会^{レセプション}の歓迎会が進行中なので，毛の入場時に代表たちは上へ声が漏れないよう「万歳！」を控えて熱烈な拍手に止まった。周・王に由る政治報告・党規約改正に関する報告は合せて1時間弱に収まったが，体調を^{おもんばか}慮って最短の政治報告を書かせた彼は散会時に自力で椅子から立ち上がれず，代表を退出させた後に^{どんちょう}緞帳を下ろして数人の執務員に由って椅子毎^{ごと}に外へ運ばれた。彼は健康上の理由で4日後の閉会式とその翌々日の中央総会に出席せず，歩行も車に乗り込む事も困難な故に以後1度も人民大会堂に行かなかった。²³⁾

老耄^{もう}を隠せぬ毛沢東は舞台裏で歩く練習を数往復してからゆっくり登壇・着席したが，後に「健歩登上主席台，紅光滿面，神采奕奕」（健脚で議長席に上り，顔色が良く表情も生き生きとして，元氣澁刺たる様子であった）と美化された。²⁴⁾ 血色の良さを形容する四字熟語が血圧の高い当人への皮肉に為る事は誰も考えなかったが，「紅光」「神采」の字面は「紅太陽」（紅い太陽）とする神格化の時流に妙に符合する。人に支えられた儘に10分ほど満場の拍手・歓呼を受ける間に足が震え出し，助け舟を出す周恩来の着席の勧めで恰好を顧みず脱力して座席に崩れ落ち動けなくなった。それでも鳴り已まぬ拍手で引っ込みが付かぬ彼は周に収拾を期待し，周は主席専属看護婦長の呉旭君（1932～）の助言で主席が皆の退場を見送ると宣言したが，毛は代表たち（総数1249名）が中々^{なかなか}退出しないのを見て，「你們不走，我也不好走」（皆が行かなければ，私も出るわけには行かない）と催促した。²⁵⁾ 後ろ髪を引かれる思いで議長席を振り返りながらの退場は10分以上掛ったが，多くの人々が不吉な予感を覚えた²⁶⁾ のに対して毛は老いる^{シヨック}衝撃を感じたに違い無く，直後から年の暮れまで打った幾つかの手は明らかに死後に向ける布石であった。先ず最終日に副主席予定者の王洪文に投票を代理させた事で後継者の最有力候補を示し，次に11月21日～12月初旬の政治局会議で周恩来・葉剣英への批判を展開させ，対米「投降」（軟弱外交）を許さず周・葉を党・軍の最高指導者としめない意志を表した。周・葉とキッシンジャー米国務長官（1923～）の会談に関する誤った報告が引金であった²⁷⁾ が，周の受難は米国との交流が多く海外での評判が蒋介石を超えそうな孫立人の失脚と

も通じる。直後の12日に政治局会議を召集して大軍区司令員の相互入れ替え異動を言い出し、13～15日に一部の政治局委員・大軍区司令員との話し合い等を経て、21日に軍委会議参加者(43人)と会見し、22日の軍委命令で北京と瀋陽、南京と広州、済南と武漢、福州と蘭州の軍区司令員の相互入れ替え(1月1日実施)が決定され、同日の中央通達で毛の提議に由り鄧小平を政治局委員・軍委委員の職位を与えた。80歳の誕生日(12.26)の節目を意識した一連の仕掛けの中で、党の指導を強調する「党政軍民学、東西南北中」の発言が出たが、「19大」で党規約に入れられた事はこの背景を見ても晩年の毛に対する継承の様に取れる。毛は8大軍区司令員の相互入れ替え異動で一举に「軍閥割拠」の芽を摘み取り、鄧に党・軍・政の要職を付けた事で実務指導部の強化と周の権勢への牽制を図った。善悪や後の結果はともかく老練な政治手腕を見せた歴史的な出来事であるが、習近平は恐らく毛の鮮やかな権力再編を意識して更に大胆な改造を断行した。

毛沢東の党・政・軍要人集団粛清は「彭黄張周」「彭羅陸楊」の様に入組が複数回有り、中国人好みの対の対を現す様に彼の死後逮捕された側近集団は「王張江姚4人組」である。寵臣の汪東興・紀登奎・呉徳・陳錫聯(11期5中全会「^{コミュニケ}公報」の辞任の件での順)は、改革・開放初期の失脚で「新4人組」と呼ばれたものの「汪紀呉陳集団」とは為らなかった。元々派閥を結成していないし辞任後の閑職付与の様に**歴史上の貢献への配慮**も有ったが、習近平時代の大物罪人の「新4人組」の命名は非公式ながら現実味を帯びている。失脚順で1番目と為る第16期中央書記処書記(7人中6位)・第16(4中全会[2004.9.16～9.19]任命)～17期軍委副主席(3人中末席)・第17期政治局委員の徐才厚(1943～2015, 99年上將)は、重大な紀律違反の嫌疑に対する党中央決定の「組織調査」(2014.3.15)→党籍剥奪(6.30政治局会議決定)→軍籍剥奪・上將階級取消(7.30軍委決定)の後、軍事檢察院の審査を受ける身で末期の膀胱癌の治療中に多臓器不全で歿し不起訴と為った。次の第17期政治局常委・中央政治法律委員会書記の周永康(1942～)は、中紀委立件(2014.7.29)の後に党籍剥奪(12.5政治局会議決定)→収賄罪・職権濫用罪・国家機密洩洩罪に由る無期懲役(天津市第1中級人民法院, 15.6.11)で罰せられた。続いて第17期中央書記処書記(6人中5位)・中央辦公庁主任・中央統一戦線工作部部長の令計劃(原姓令狐, 1956～)は、中紀委立件(2014.12.22)→党籍・公職剥奪(15.7.20政治局会議決定)→収賄罪・国家機密違法取得罪・職権濫用罪に由る無期懲役(天津第1中級人民法院, 16.7.4)と政治生命を葬られた。最後の第16～17期政治局委員・軍委副主席(1位)の郭伯雄(1942～, 99年上將)は、15年4月9日に中央の決定に由り拘束され、党籍剥奪(7.30政治局会議決定)→収賄罪に由る無期懲役・上將階級剥奪(解放軍軍事法院, 16.7.25)に処された。周と令、郭と徐の癒着や汚職・反習傾向からすれば「新4人組」の称には頷けるが、「林彪・江青反革命集団」特別裁判の判決(江青・張春橋は執行猶予2年の死刑[猶予期間満了後に其々無期・無期→18年懲役に減刑], 王洪文は無期懲役, 姚文

元は懲役 20 年、陳伯達・黄永勝は 18 年、呉法憲・李作鵬は 17 年、邱会作は 16 年）と比べても、勝るとも劣らぬ峻烈な「政治死刑」（政治的処刑）と言える。『礼記』「曲礼上」の「刑不上大夫」（刑は大夫に上らず）に擬えた「刑不上常委」は、鄧小平時代以来の最高指導部の安穩を維持する為の不文律とされて来たが、政治局常委及び経験者に刑罰を課さない超法規的な特権の慣例が破られ、鄧小平時代以来の最高指導部の安穩の為の「刑は常委に上ばず」の不文律が破られ、軍の制服組の頂点に居た両雄が揃って「落馬」（転落、失脚）し、党・軍・国最高指導部成員が輩出し「文革」中の失脚でも党籍剥奪は免れた中办主任への制裁も前例が無い。俱に衝撃的な彼等の罪の中で郭・徐に由る軍内昇進の為の贈収賄の慣習・体系システムの形成が最も重く、林派「四大金剛」に対しても実施しなかった階級剥奪は軍の最大の汚辱の元凶の自業自得である。上層部まで侵蝕した腐敗は大陸時代の国民党政権の末期症状を呈す様に深刻な故、「亡党亡国」（党・国の滅亡）を阻止する「反貪腐」（汚職・腐敗撲滅）は大衆の喝采を博し、習の「打虎」（虎退治）は 1948 年の蔣経国の同じ名目の行動と違って凱歌を奏した。

「新 4 人組」も孫政才も準極刑（終身刑の無い故の造語）の無期懲役に処されたのは、中国独特の「痛打落水狗」（水に落ちた犬〔落ち目の悪人や失脚した敗者〕に痛撃を加える）の発想が根底に有る。毛沢東は林彪事変後の 1971 年 11 月 20 日に武漢地区座談会に参加する党政軍要人に対し、中国現代文学の旗手魯迅（原名周樹人、1881～1936）の雑文を読むよう勧め、「魯迅は中国的第一個聖人。中国第一個聖人不是孔夫子，也不是我。我算賢人，是聖人的弟子。」（魯迅は中国の第一の聖人だ。中国の第一の聖人は孔子ではなく、私でもない。私は賢人に算え得る。聖人の弟子だ。）と語った。²⁸⁾ 中共が偉大な「文学家・思想家・革命家」として崇める魯迅は、「論“費厄滌頼” 应当緩行」（「フェア・プレー 光明正大」）の時期尚早説を論ず。『莽原』[莽原社] 半月 [月 2 回] 刊 1926.1.10 創刊号）の中で、水に溺れた負け犬を助けると咬まれかねぬから徹底的に痛め付ける可しという考えに同調した。鄧小平が 2 度の復活後に直ぐ毛沢東・華国鋒と道を異にした事は中国には有益であるが、彼に斬られた趙紫陽が次及び次の次の時代でも復権どころか軟禁も解かれなかったのは、皮肉にも奇跡的な不死身が示した「死灰復燃」（死灰またも復燃ゆ）の恐さの所為かも知れない。鄧とモスクワ中山大学（全称＝中国労働者孫逸仙大学、1925～30）の同級生（26.1～27.1）である蔣経国も、執政中に張学良・孫立人の釈放に踏み切れず父君の汚名を引き継いだ。死の半年前に 38 年余り続いて全域戒厳を解除し恐怖・憎悪の連鎖を断ち切った。恰度 30 年後の孫政才失脚は台湾の世襲政権も持っていた強権統治の遺伝子と思わせるが、蒋介石が総統復任（1950.3.1）後に長男を国防部政治部主任に起用した事から、軍の掌握を重視し政治工作を有力な手段にする中共の統治様式と通じ合う。郭伯雄・徐才厚は軍委副主席就任の前に其々総参謀長内定者・総政治部主任であったが、総政主任は建国初期の劉少奇や「文革」後期の李德生・張春橋の後の転落の様に、この要職に就いた者は大物ほど後に権力闘争で政治の檣舞台から降ろされる事が有る。第 10 代（1987.11～92.11）の楊

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方 (1) (夏)

白氷（原名尚正、1920～2013、88年上将）は、「暴乱平定」の功績に由り13期5中全会（89.11.6～9）で中央書記処書記（4人中末席）・軍委秘書長に昇進したが、前職の北京軍区政治委員（第10代、85.6就任）の「高危」が移ったかの様に後に失速した。鄧小平は5中全会で引退の際に軍委常務副主席兼秘書長（82.9就任）の楊尚昆を軍委第1副主席に上げたが、政治局委員・国家主席（第4代、88.4.8～93.3.27）でもある彼と弟白氷の権勢を抑える為に、3年後の第14期中央発足時に尚昆の引退と白氷の退役（代りに体面を保つ政治局入り）にした。12代目（2002.11～04.9）の徐に続いて「隔代失脚」（造語）の「新常态」が現れるかの如く、第14代（12.10就任）の張陽も改編後の軍委政治工作部の初代主任と為った翌年に倒された。中央委員・上将の相継ぐ失脚の中で大物でない彼は脇役として注目度が低かったが、取り調べ中の11月23日の午前に自宅で首を吊って自殺した結末で歴史に刻み込まれた。汚職調査中の高官自殺も珍しくないご時世と雖も重要標的の彼の自殺が許されたとは、当局の絶大の監視・拘束能力を考えても白昼に鬼を見る様な夏の怪談に聞える。最高階級の将領の自殺は前代未聞で中央委員が醜聞を追及されて自ら命を絶つのも奇聞だから、「19大」の翌月の「畏罪自殺」（裁きを畏れて自殺）は不可解で不吉な異変である。

『現代漢語詞典』の【畏罪】の語釈は「働犯了罪怕受制裁」（働罪を犯して制裁を恐れる）で、用例の「～潜逃 | ～自殺」（「潜逃」= 潜に逃亡する）は該当者の間々有る行動である。『広辞苑』の【自殺】の「自ら自分の生命を絶つこと。自害。“一服毒”」、及び【自殺関与罪】【自殺教唆罪】【自殺行為】【自殺的】【自殺点】【自殺幫助罪】の熟語項付きと比べて、『現代漢語詞典』の「働自己殺死自己」（働自分で自分を殺して死なせる）は単純過ぎるが、動詞の「殺」（殺す）に結果補語の「死」（死なせる）を付ける徹底ぶりが中国的である。『広辞苑』の自賛の「“国語+百科”辞典の最高峰」は中国では『辞海』に適用するが、第6版（辞海編輯委員会編、夏征農・陳至立主編、上海辞書出版社、2009）の【自殺】の「“他殺”的対称。故意用某種手段終結自己的生命。如自縊、投水、刎頸、服毒等。在尸体檢驗中、应注意區別偽装自殺。」（「他殺」の対義語。故意にある手段を用いて自分の生命を終結させる。例えば縊首・入水・刎頸・服毒等。死体の檢視に於いて、偽装自殺と區別するよう注意する必要が有る）は、実用性・有益性を求める傾向の強い国柄らしく検死の注意事項まで付しているが、「自殺大国」日本と対照的な「偽装大国」中国の特色を窺わせる点が注目に値する。『日本国語大辞典』の同項目は「春秋左伝－昭公二七年“子悪聞之、遂自殺也”」を出典とするが、魯昭公27年（前515）の1500年後の「往生要集（984-985）大文一」等7点の用例が付く語釈は、「【名】自分で自分の生命を絶つこと。自害。自死」に止まる。『日本大百科全書』（編集著作・出版者＝相賀徹夫、全25巻+索引1巻、小学館、1984～89）の【自殺】（執筆＝澤口彩子・岩井弘融）は、「実際に事故死や他殺と紛らわしい場合も多く、これらを區別する必要がある」と言う。日本独特の武士の切腹（自殺刑）・親子心中や1955～60年の世界一の自殺率等の紹介の様に、万事に細心

な注意を払う国民性と共に自殺頻発の国情もその1文を為す要素に有ろう。中国では日本漢字検定協会主催の「今年の漢字」(1995年開始)の真似をして、2006年に国家語言資源監測与研究中心(観測・研究中心機構)等主催の「漢語盤点」(中国語[年度]点検)が発足し、09年の「国内字・国内詞・国際字・国際詞」に「被・民生・浮・金融危機」が選ばれた。3年後の『現代漢語詞典』第6版の【被】に⑤「動用在動詞或名詞前,表示情況与事实不符或者是被強加的(含諷刺、戲謔意)」(動動詞或いは名詞の前に用い、狀況が事實に合わない、又は強いられたものであることを表す[諷刺・揶揄の意を含む])が追加され、用例の「～就業|～小康」(「就業者とさせられる」「一応の余裕が有る部類に算えられる)は、指標達成の為の水増し統計が罷り通る世相に対する皮肉として流行・定着して来た。「被」の受動形の新しい用法の「～自殺」は自殺を強要されるか偽装される意で、自殺(と)させられる事が多いから張陽の変死も自ずと怪訝・懷疑を以て見られた。

注(お断り:本稿中、20年余り以来の旧作で引用・利用文献を記した部分の出处は、紙幅の都合で省略し、単行本化の際に改めて表示する。以下の論述で取り上げる予定の一部の内容に就いても、後の注又は本文で掲げたい。)

- 1) 『鄧小平文選(1975-1982年)』(中共中央文獻編輯委員會編,人民出版社,1983。94年再版の改題=『鄧小平文選』第二卷)所収「答意大利記者奧琳埃娜・法拉奇問」(1980年8月21・23日)。
- 2) 関川夏央『司馬遼太郎の「かたち」——「この国のかたち」の十年』(文藝春秋,2000)第1章「日本はかならずしもアジアでなくともよい」に、「“Stateやない、Landを書いてみたいんや”」と題した1節の詳述が有る。
- 3) 『中国文化大革命事典』(陳東林・苗棣・李丹慧主編,西紀昭・山本恒人・園田茂人他翻訳,[福岡]中国書店,1996)の「人物」篇の【陸定一】では、68年5月23日に逮捕・投獄とされる。陳清泉・宋広涓「冤案不平拒不出獄的陸定一」(『炎黄春秋』月刊[中華炎黄文化研究会主管]2000年第6期)では、4月下旬(「5.1」国際的労働者祭の2日前)に秦城監獄に移送されたとされるが、「中共中央転発中央組織部『關於陸定一同志的復査報告』(概要)」(中発[1969]44号,6.8)の「5.23」が權威性を持つ。
- 4) 『中国文化大革命事典』の【陸定一】の「1975年12月11日、中共中央は『陸定一問題に関する決議』を発表した」と違って、「事件」篇の【1975年】中の【党中央の陸定一問題に関する決議】の記述は、「1975年12月13日中央政治局は特別事項審査小組第1弁公室の『陸定一問題に関する審査報告』を批准し」と為り、「日録」篇の75年12月13日の項でも、政治局は13日に同報告を批准し陸を永久に党から除名したと記す。【陸定一】中の「発表」は下級に配布し伝達させる慣例に符合しない為、複数記載の有る13日説は尤もらしいが、「中共中央転発中央組織部『關於陸定一同志的復査報告』(概要)」の通り11日が正しい。猶、「【陸定一】に「6月、全国政協會議副主席に追加当選」と有るが、『人民日報』79年7月3日の報道に拠ると前日の事であった。
- 5) 『艱難歲月:吳法憲歲月』(上・下2巻,[香港]北星出版社,2006)等に有る様に、彭德懷の処置は「專案組」や主管の黄永勝ではなく毛が決めるのであった。
- 6) 9期2中全会の内情・背景に関する記述は、中共中央文獻研究室編,逢先知・金沖及主編『毛沢東伝(1949

毛沢東の呪縛と習近平の「超限戦」——古今の「盛衰興亡周期律」と中国の行方 (1) (夏)

- 1976)』(上・下2巻, 中央文献出版社, 2003) 第38章「林彪事件」, 高文謙『晩年周恩来』(『紐育』明鏡出版社, 2003) 第5章「周旋在文革營壘の内鬪之中」第4節「廬山會議の真相」, 解学恭「九届二中全会日記」(『炎黄春秋』2015年第6期)等に基づく。
- 7) 『毛沢東伝(1949—1976)』第43章「臨終的日子」等に詳述が有る。
- 8) 『毛沢東伝(1949—1976)』第25章「廬山會議後的一年四個月」。
- 9) 葉永烈「我和江沢民伝書内書外的秘密」「庫恩写江沢民伝的緣起」, [香港]『亜洲週刊』2005年3月6日号。
- 10) 初鹿明博(立憲民主党所属議員)「安倍総理の所信表明演説の原稿に関する質問主意書」(2016.10.3提出), 内閣総理大臣安倍晋三「内閣衆質一九二第三六号」(10.11), 衆議院 ホームページ H P 所載。
- 11) 古傲狂生「消失の姓氏」, 『人民文摘』(人民日報社)2015年第1期。
- 12) 「苒・庵・撫・鶯 使用可能に人名漢字578字追加/法制審部会見直し案」(『朝日新聞』2004年6月11日夕刊), 「不評人名漢字外します/批判集中の数十字/ワースト5 糞・屍・呪・癌・姦/見直し案を法務省修正」(同7月9日), 「人名漢字/追加は結局488字/当初案から88字削る」(同8月14日)。
- 13) 丸山眞男「福沢諭吉の「脱亜論」とその周辺——日本学士院論文報告 一九〇九年九月」, 『丸山眞男話文集 4』(丸山眞男手帖の会編, みすず書房, 2009)所収。
- 14) 「央视出醜 記録片『胡耀邦』被揭公然造假」(張松風記者), 新唐人電視台(NTDTV.COM), 2005年11月23日。
- 15) 「『中共一大嘉興南湖會議』研究成果發布」(謝文・王旻魁・俞海萍記者), 『光明日報』2018年6月22日。
- 16) 「文革」中の張聞天の事績・文献は, 主に程中原著『張聞天伝』(当代中国出版社, 2000)に拠る。
- 17) ニクソン米大統領との会見での発言(1972.2.21), 松尾文夫・斎田一路訳『ニクソン回顧録』第1部『栄光の日々』(小学館, 1978 [原著と同年]) 第7章「世界を変えた一週間」。
- 18) 蘇曉康・羅時叙・陳政『「烏托邦」祭——一九五九年廬山之夏』(中国新聞出版社, 1988) 終章「余韻: 深循環」に詳述が有る。
- 19) 祝庭勳『李徳生在動乱歲月——從軍長到中央副主席』(中央文献出版社, 2007) 第16章「毛沢東交代李徳生, 調一個師進駐北京市郊」, 『毛沢東伝(1949—1976)』第38章「林彪事件」。
- 20) 祝庭勳『李徳生在動乱歲月——從軍長到中央副主席』, 第32章「辞去党中央副主席職務」。
- 21) 陶朱問「会打仗的不一定懂政治 温玉成文革沈浮録」, 南方週末網 2005年1月14日。
- 22) 「吳忠將軍在对越自衛反擊戰中 辺指揮辺被審査」, 鳳凰網 2009年11月6日(人民網より転載)。
- 23) 翟華「毛沢東的N個最後一次」, 翟華博客「東方文化西方語」2008年9月9日。
- 24) 徐景賢『十年一夢——前上海市委書記徐景賢文革回憶録』(〔香港〕時代国際出版, 2003) 第22章「毛沢東為何選王洪文接班?」第5節「王洪文代替毛沢東投票, 擢昇為中共中央副主席」。
- 25) 『毛沢東伝(1949—1976)』第10章「十大前後」。
- 26) 注24に同じ。
- 27) 注25に同じ。
- 28) 『毛沢東伝(1949—1976)』第39章「一九七二年内政和外交」。

(夏 剛, 立命館大学国際関係学部教授)

毛泽东的“魔幻缚”与习近平的“超限战” ——古今“盛衰兴亡周期律”及中国之去向（1）

习近平 1997 年 15 大上以排名末位的候补委员进入党中央后不断稳步而又快速地上升，于 2012 年成为中共建政后第 1 个不经前任指名而径登党魁席位者。其后仅 4 年即取得跟毛泽东、邓小平、江泽民相同的领导“核心”称号，更在 17 年 19 大上将冠己名的“思想”加进党章，18 年全国人大上修改宪法、废除国家主席任期限制，大有集全权于一身、连任 3 届以上的势头。

本文对比习、毛及其“新”、旧两个时代，剖析习试图回归的“建党、建国初心”中的毛的遗传基因和影响，指出二者的异同及各自执政的得失等，由领导人及治理方式的变或不变探求中共的本质特征，进而联系毛生前注重的中国历史“盛衰兴亡周期律”，推论中共、中国在今后一段时期内的走向。

本部分以中国的“重名文化”读解“核心”称号所具杠杆作用，指出习继承了毛的“党领导一切”、“先军”统治的传统，回顾毛的“党祖、国父”神话确立及隐形支配，结合中共自命的“伟大、光荣、正确”和古贤追求的“立德、立功、立言”，观察习欲建留名青史的殊勋的挑战，发现其“梦想”豪言深层的渴望辉煌和华夏心性，及“中国梦”含追赶“美国梦”、超越“科学发展观”的成分。

进而注视 19 大前“打虎”轮到孙政才、房峰辉、张阳，联系毛泽东时代的总参谋长和江泽民时代以来的直辖市首长的高危，盘点建国后高层政治斗争的连绵不绝，以及其胜负导致高官的沉浮、荣辱多呈剧变。从张学良受蒋介石父子多年“严加管束”反观赵紫阳被卸职后遭终身软禁，试论国共两党在肃清政敌方面不无类似双胞胎的同根性质。

中共 1 大开幕（1921.7.23）90 周年之日在第 2 会址——浙江发生温州高铁惨祸，中国经济经此拐点减速呈中高成长新常态的变化使人感到天数。推及生日和党庆、国庆相重的宋任穷和黄克诚、朱镕基的政治生涯，继而聚焦北京军区、卫戍区司令员的高危，直观与蒋介石在台湾制造孙立人案所怀的戒备兵变心理之相通。

最后审视习近平粉碎周永康、郭伯雄、徐才厚、令计划“新 4 人帮”，肯定其挽救党、国于近乎国民党大陆时代末期的极度腐败之中，同时在改组 4 总部、撤销大军区等打造新军的举措中，看到和毛泽东 1973 年 10 大后安排后事时对调 8 大军区司令相仿的手腕。

（夏 刚，立命馆大学国际关系学院教授）